

19世紀初頭の  
ネブラスカインデ  
ィアンの  
土地と  
生活習慣

1804年の七月にメリウェザー・ルイスとウィリアム・クラークに指揮された探検隊が、現在のネブラスカの東の州境にそって、ミズーリ川を少しずつ遡っていった。その探検隊は、太平洋まで行き、そして、1806年の9月の終わりに戻ってくるという旅のうちの、最初の2ヶ月と、630マイルを経過していた。ジェファソン大統領の指示は、明解そのものであった：ルイスとクラークは、新しく手に入れたルイジアナ領域を、オレゴンの先まで探検と調査をし、“西部にある大洋”にいたる大陸を横断する“直接的、かつ、実用的な水路”を見つけ出し、さらに、その地域の毛皮の商売の可能性について評価をし、その地の環境のあらゆる局面についての情報をかき集め、そして、一般的には、そのミズーリと西部を越えて、アメリカ人の進出の権利を主張してくるつもりであった。<sup>1</sup>

アメリカの原住民インディアンというのが、これらの目的のすべてにおいて中心をなしていた：それは、単に彼らとその地域に住んでいたということだけではなく、合衆国の憲法のもとで、彼らがおも土地の所有者として存在しているということであり、問題は、最近こじつけられた合衆国の統治権に対するものであった。その結果として、ジェファソンのインディアンにかかわる指示は、とりわけ特殊なものであり、そして、それを完全に遂行することであった。ルイスとクラークは合衆国の西部に住んでいるインディアン達の人口、支配している領域、そして、その生活習慣についてアメリカで最初の系統的なまとめをした。彼らは、言葉を記録し、村落の数、小屋の数、戦士の数、そして、合計の人口を予測し、さらに、それぞれのインディアン達が何処の地域を自分たちの支配領地かと主張しているのか、取引のなかで果たしている彼らの役割や敵対関係、そして、同盟関係などについての記述をした。とりわけ重要であるのは、1820年以後の仕事として与えられた、ミズーリ川の下流地域に住んでいるインディアン達(オセージ族、カンザ族、オトエーミズーリ族)について、当時、合衆国の東部では急激な人口増加があり、その結果、インディアン達を再配置する必要があったが、そのために、かれらに移り住む意思があるかどうかの調査をすることであった。<sup>2</sup>

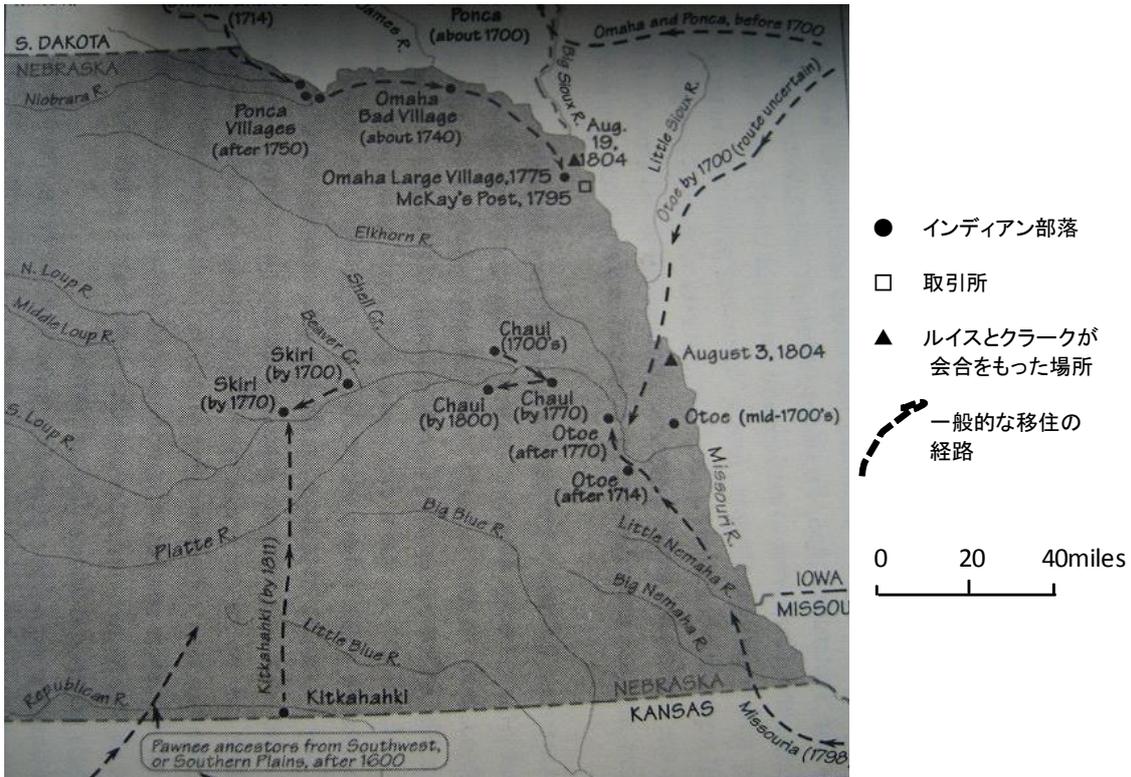


Fig. 1 この地域への住みつき: 移住と初期の村の場所 およそ1800年頃

その時までには、調査隊は Platte 川の河口を過ぎており、探検隊はその地域のインディアン、オトエーミズーリの部族が、何処にも見えないということに気がしていた。彼らは、セント・ルイスの Jean Pierre Chouteau のような商人たちからの議論から、そして、Francois Labiche, Pierre Cruzatte, Pierre Dorion そして、George Drouillard —彼らは、ガイドないしは通訳として雇われた者達であるが、こうしたベテランの開拓者達からの情報で、東部ネブラスカのインディアン達（オトエーミズーリ族に加え、オマハ族、ポウニー族、ポンカ族など）が、部族の夏のバイソン猟のためにこの平原から出かけているということを知ったのだろう。彼らは、インディアン達が彼らの夏のバイソン猟から彼らの村に、7月には、早めに、野菜とか、トウモロコシの収穫のために戻ってきて、その時に彼らと多分接触できるものと期待した。ルイスとクラークは会合を持つことを望んだ：ネブラスカの東部は、ジェファーソンのインディアン政策の、そして、彼らの外交的な手腕のテストの場のつもりであった。

7月22日に、探検隊は、Platte川の河口からおよそ10マイルほど上流の、アイオワ側にキャンプを設営した。そして、Drouillard と Cruzatte が、Elkhorn川とPlatte川が合流する地点の近く、西に18マイルほど離れたところにあったオトエーミズーリ部族の村に使いに出された。ところが、彼らがそこに着いたときには、村には誰もいなかった。そして、村から出て行った道は、敵対的なインディアン達（カンザ族とか、オマハ族、或い

は、ポウニー族といった部族をさしていた ) により、彼らの狩猟の後を付けられないように隠されていた。

7月28日に探検隊に幸運が訪れた。というのは、**Drouillard** が、たった一人ミズーラ族の男をキャンプにつけてきたのだ。**Drouillard** は、バイソンのいる遠くの地域に行っている自分たちの仲間の主流と一緒にいるために馬を必要としていた約20ほどの家族と一緒にミズーリ川にそって狩をしていたのだ。<sup>3</sup> ルイスとクラークは直ちにインディアンを見つけ、それから二・三日後に、ミズーリ川のさらに上流で開かれた会合にかけらをつれてくるよう、そのための斥候を送りだした。

会合は、8月の3日に、現在のネブラスカの **Fort Calhoun** ( fig. 1 ) <sup>4</sup> の近く、ミズーリ川を見渡すことの出来る“ゆるやかに高くなった”場所で開かれた。会合にはオトエーミズーリ族の6人の主なものが出席していたが、しかし、主要な酋長である、**Little Thief** ( We‘ar-ruge-nor ) と **Big Horse** ( Shon-go-ton-go ) は参加していなかった。会合は、それから百年もの後まで引き継がれるための条約の会議を特徴付けるような緊迫した儀礼と外交的な戦略の著しいものであった。メリウエザー・ルイスが **Washington D.C.** に存在する“偉大なる父”と、そして、彼の“苦難の”インディアンの子供達ということに言及する言葉に溢れた、とても力強いスピーチ（それからの二年間に彼は何度となくこの演説を繰り返した）をした。彼は、インディアン達に、彼らが隣の部族同士平和を維持し、そして、アメリカ人がミズーリ川を通行する邪魔をしなければ、信頼できる毛皮の取引と、**Platte** 川の河口にかれらの居住地を認めると約束した。彼は、合衆国の力を力説し、酋長達と戦士達がワシントンに来て、彼ら自身でそれを確認するよう、彼らを招待した。そして、最後に、もっと不穏なことに、かれは、インディアン達に、“悪い鳥達との会合”には耳を傾けないように、或いは、彼らは、“大平原の草を焼き尽くす火のように”、すべてを破壊するだろうと忠告した。贈り物(衣類、旗、そして、メダル)が、インディアン達に、“彼らの結果の程度に応じて”配られ、そして、彼らは、フランスやスペインの象徴となるものは、ルイスの説明したように、今や、アメリカだけが面倒を見ることになるので、ことごとく返却するように頼まれた。

表面上は、とても友好的な雰囲気では進行し、ルイスとクラークはオトエーミズーリ族との別の会合、この時にはオマハ族も招いたが、この会合がミズーリ川のさらに上流で開かれるように計画した。彼らの目的は、オトエーミズーリ族とオマハ族の間に生じていた亀裂、これはお互いの襲撃や復讐のためにできたものだが、これを修復するというものであった。しかし、オマハ族は、何処にも見つけることができなかった。そして、オマハの小川の村は、荒れたままで廃墟と化していた。(fig.1) <sup>5</sup>

8月の18日になり、**Little Thief** や **Big Horse** も含め、9人のオトエーミズーリ族の酋長と戦士の一団が探検隊のキャンプに馬に乗ってやってきた。会議は次の日に開かれ、ルイスは、アメリカの新しい注文の条件を説明する演説を繰り返して行った。そして、**Little Thief** と **Big Horse** がその返事をした。それはとりも直さず、インディアン達が彼ら自身の

議題を懇願する準備をしていたという証拠であった。それは、もし、合衆国がオマハ族とか、ポンカ族或いはそのほかのミズーリ川のもっと上流にいるインディアン達とさらに友好的なつながりを持つようになると、彼らのセント・ルイスにおける毛皮の取引の戦略的に有利な立場が崩れてしまうということに関するものであった。また、彼らは、ウィリアム・クラークが彼の日誌のなかで報告していることによれば、“彼らに対する土産に対して十分に満足していなかったのである。”<sup>6</sup> といわけで、会議は、気まずい雰囲気の中で終り、インディアン達は、もっと沢山の贈り物、とりわけ、ウィスキーを要求し、隊長達は、彼らの厳粛なスピーチが、インディアン達には殆ど何も印象的なものを与えていなかったもので、憤慨していた。が、しかしこれは決して驚くようなことではなかった。と言うのも、彼らは、もう一世代以上も、同じような、“父なるスペイン”を推進するような演説を何度も聴いていたからだ。

探検隊は、次の日にさらに上流に向けて出発して行き、9月の5日には、Niobrara川の河口の近くにあるポンカ族の村のそばを進んでいた。そして、ネブラスカの州境を越えて、あまり詳しい地図のない大平原の北部の地域に入っていた。ルイスとクラークは、オトエーミズーリと接触しただけだったが、しかし、彼らは、ネブラスカの東部に住んでいたこの地、固有のインディアン達についての非常に重要な情報を収集することができた。彼らがどんな人たちであるのか、どんな生活習慣を持っているのか、そして、アメリカ人が統治をするようなときの前には、彼らの社会はどんなふうになり直るのかといった事柄についての情報であった。

## ルイスとクラーク以前

1800年代にネブラスカの東部に住んでいた五つのインディアンの地域のなかで、ポウニー族だけが、非常に深い歴史的なルーツを主張することができた。そのほかの部族—オトエーミズーリ族、オマハ族、そして、ポンカ族—は、18世紀にここに移り住んできたものであった。にもかかわらず、もともとの地に生え育っていたポプラの木のように、こうして後から入ってきた部族は、速やかに、そして、しっかりとこの地に根を下ろしていた。19世紀のはじめ頃までに、このネブラスカの東部は彼らの世界の中心地であり、毎日の生活の場所は、彼らの永遠の生面のリズムと結びついていた。

ポウニー族の Skiri (Loup) という一族と、Chai (Grand) という一族はともに、1600年から1750年にかけて Loup 川と Platte 川の土手の上にある村に住んでいた、Loup 川下流の人たちの直接の子孫達で、まず間違いなく、もともとは南西部か、或いは、南の平原地域から移り住んできた人たちだった。ネブラスカに住んでいるポウニー族の子孫達は、多分、もっと昔の中央平原部の伝統(900 から 1450年)時代まで遡ることが出来るだろうが、依然としてこれははっきりしていない。考古学的な検証の結果、1700年までに Skiri 族は、Loup 川の北側に沿って、小さな部落を沢山作って住んでいたが、一方、Chai 族は、Shell

川のもっと東に住んでいて、その後、Platte 川の南側と、Skull 川の領域の土手で生活していた。<sup>7</sup> 1750 年代までに Kitkahahki (Republican) と Pitahawirata (Tappage) の一族が、Chaui 族から分離していった。こうした分派の出来事の原因は過去にうずもれてしまっているが、こうしたことは、リーダーシップとか統治に関する利己的な争いによるものが多かった。幾つもの村に分かれていくこうした細分化は、たとえば、材木のような貴重な、そして、少なくなった資源を、大きな人口で最大限利用するための分別ある判断だったのであろう。

18 世紀の後半までに、ヨーロッパ人やアメリカ人たちが、内陸に押し込められたインディアン達の領地に、アパラチアから大平原にかけて、あちらこちらから、西へ西へと進入してくると、ネブラスカの東部も住むには危険な地域となった。ポウニー族は、より大きな入植地を守ろうと必死になった。1800 年まだ、Skiri 族は、Loup 川のテラス大地、現在のネブラスカの Palmer 辺りに、非常に大きな村、もしくは、町(広さにして、20 から 40 エーカー程度)を作って生活していた; Chaui は、Bellwood や Linwood に近い、Platte 川の南側に二つの村を作っていた;そして、Kitkahahki 族は、Cloud と Cuide Rock(fig. 1) の間の Republican 川を見下ろすテラス大地の南にかけて住んでいた。1811 年までに、Kitkahahki 族は、Kansa 族の圧迫を受けて、Loup 川の北側に移動してきていた。Pitahawirata 村の位置は、現実であれば、それは、Chaui の村から分かれたものであったが、不確かである。

考古学的な証拠が、ポウニー族の伝統により部分的に確証されている。ある一つの伝統が、“南の部族”(Chaui, Kitkahahki そして Pitahawirata) は、Skiri 族の分派であり、かれらは、もともとは1つの部族の Kawarahki 族であった。<sup>8</sup> 事実、Skiri 族は、近くに住んでいた南の一団よりも、1600 年以後に分かれて行き、サウス・ダコタのミズーリ川流域に住んでいた Arikara 族ともっと密接な共通点をもっていた。他の伝統、彼らが 1870 年代から 1880 年代の人類学者の George Bird Grinnells と関係付けられるときにかろうじて思い出されるのであるが、それは、もともと合衆国の南西部のウィチタの血統を持ち、それから漸次北に移り住んで行き、南西部の平原に位置していたウィチタを後にしたという、前歴史時代のポウニー族のことである。<sup>9</sup> 言語学的な解析をし、時代が A.D.になった最初のわずか二・三世紀の間にウィチタ族とポウニー族との分離がなされたということが明らかにされた。

Skiri 族と Chaui 族が渡れたのと大体同じころ、オトエ族(彼らは、スー族の言葉を話す Chiwere 部族の一部族であった)は、より武装化した、敵対関係にあったダコタ(スー族)の人たちに追われて、五大湖の周りであったもともとの場所からミネソタの南部、ならびに、アイオアの北部を横断して西の地域に移り住んでいた。その、ダコタ族や、彼らの南に住んでいた、同じように好戦的ソーク族(Sac 族) やフォックス族たちも、白人達の侵入や、その結果起きた狩猟の対象となる動物の減少のため大平原のバイソンが沢山居る地域に移動していた。

オトエ族は、繰り返し繰り返し、東部からの打撃を受けていたが、彼らは、1700年ころ、Little Sioux River やミズーリの東側の土手に辿りつくまで、相変わらず、アイオアや、Blue Earth River の辺の部落に住んでいた。<sup>10</sup> そこで、彼らは、再び、ダコタ族の犠牲となり、南のほうに移っていった。1714年にフランス人の探検家 Etienne Veniard de Bourgmont が、彼らの村を、Platte 川の下流 Salt Creek の合流点、ここは、Chaui の入植地から東に約 30 マイルほど行ったところであるが、ここに設定した。<sup>11</sup> オトエ族は、その世紀の残された期間を Platte 川の河口の近くに居住していた。(fig. 1) 彼らには、そこで、彼らに近い部族のミズーリ族が、ミズーリの西部のそれまで彼らが住んでいた故郷で、Sauk や Fox 族に襲われ、1798年になって、彼らと合流して一緒になっていた。このことが、ミズーリ族が、19世紀の殆どの間、一つの部族として固執してきたことを見過ごしてはいたけれども、その時以来、オトエ族とミズーリ族は基本的には、“一つの部族”になったのだ。<sup>12</sup>

オトエ族と同じように、オマハ族やポンカ族は、ダコタ族によって北東部からネブラスカの東部に追いやられてきた部族であった。彼らは当初、Kansa 族とか、Quapaw 族、そして、Osage 族なども含めた Sioux 族の言葉を話す Dhegiha の単独分派の一員であった。この分派が分かれたずっとあとであるが、19世紀の後半においてすら、こうした部族の人たちの似たような方言とか、生活の伝統、そして、社会的な組織がある共通の源に帰されていた。オマハ族の伝統に従うと、彼らのももとの故郷は、“とても大きな水の固まりのある近く”とあるから多分、それは五大湖のことを指しているのだろうが、その近くの森林の茂る地域であった。<sup>13</sup> 数世紀の跡を辿ってみると、彼らは、オハイオ川を下り、ミシシッピー辺りまで移住して行き、その過程で、分派したものが Quapaw 族、Osage 族、そして、Kansa 族となった。

そうしたグループの残り、オマハ族やポンカ族の子孫達は、17世紀の終わり頃、彼らがアイオアを横断してミズーリ川の東側に追いやられるまで、ミシシッピーの上流地域に住んでいた。<sup>14</sup> そして、18世紀の多くの期間、オマハ族とポンカ族は、アイオアの西部からサウス・ダコタの東部にかけての地域に共同で居住していた。オマハ族とポンカ族の伝統はともに、近くのアリカラ族と度々接触し、彼らから土作りの家の造り方や、多分、トウモロコシの栽培の方法なども取り入れていたと伝えている。定かではないが、1700年代に、ポンカ族は、オマハ族から分離し、彼らがブラックヒルズ辺りまで、西に移動してゆく期間を経た後、彼らは、1750年ごろに、Niobrara の河口付近に自分たちの村を作った。ポンカ族は、彼らの村を Ponka Creek や Niobrara の下流域の沿って造りながら、その世紀の残された期間、この地域一体にとどまっていた。(fig. 1)

オマハ族は、ミズーリ川の西側に沿って、現在のネブラスカ辺りまで、南に下がり続けた。現在の St. James の町近くにある Bow Creek に作った彼らの最初の村は、直ぐに見捨てられ、オマハ族の人たちの間で、内部抗争を起し、このために Bad Village (Toniwonpwhi) というあだ名をつけられた。不気味に迫るダコタ族の恐怖の影で、オマハ族は、1775年までに、Omaha Creek のある南に移動し、そこに、Large Village

(To<sup>ni</sup>won<sup>to</sup>nga) (fig.1) と言う村を作った。1795年にスコットランド生まれのスペイン人の探検家 John Mackay が取引所を作ったのはその近くで、オマハ族は、こうして必然的に外部の経済体系と政治体系の軌道の中に引き込まれていった。

1790年以後であるが、ネブラスカの東部のインディアン達は、ヨーロッパ人たちと頻りに接触するようになったが、彼らは、17世紀以来アメリカに住んでいるヨーロッパ人達から、影響を感じていた。その最悪なときは、この接触が病気を、すなわち、天然痘、これは、Mackay が 1795年に書いているように、健康な人たちでさえ、“普遍的といえるほど恐ろしい、大量死”<sup>15</sup>でもって、死に至らしめるものであった。

ルイスとクラークがここを訪れたときには、この五つの部族は、少なくとも 1750年以來、この地域を襲っていた大流行の波が再び起こっていたことで、その人口も、また、力も、大胆さも劇的に減少していたときであった。探検隊は、1804年にネブラスカの東部に生き残ったインディアンの数は、6,850人程度：オトエ族 500、ミズーリ族 300、オマハ族 900、ポンカ族 250、そして、ポウニー族 4,800であった。<sup>16</sup> 彼らは、この事実は、彼らを肥沃で、狩猟動物と魚に溢れ、そして、沢山の種類の野生の果物で満たされていると思っていた国の、散在した人口だと理解した。この過疎の原因こそ、まさしく、彼らが認識していたように、天然痘であったのだ。

ルイスとクラークは、ネブラスカのインディアン達が、1800年から 1801年の天然痘の流行から弱りきっているということに気がついた。この大流行は、コロンビア川からメキシコ湾岸までのインディアン達の居住地をことごとく、壊滅状態に陥れていた。<sup>17</sup> この病気は、オトエミズーリ族、オマハ族、そして、ポンカ族の間にも大きな打撃を与えていたので、1801年にセント・ルイスにいたスペインの統治官は、すべての商人に対し、こうした部族の居留地から、町から一マイルほど離れた孤島に強制的に戻ってくるように、そして、消毒をするために“持っている毛皮は煙でいぶる”ように指示した。<sup>18</sup>

大流行の記録は、オマハ族のものが最も完璧である。ルイスとクラークは、おそらく、James Mackey の報告を信用して、オマハ族は、1795年に“700人もの戦士がいると自慢していた”、これからすると、全体の人口は、2,000人以上になると推定されたが、そのように主張していた。それから、天然痘が 1800年から 1801年の冬に襲ってきた。オマハ族は、ルイスとクラークが近くを通過する時に、夏に恒例のバイソン猟に簡単には出かけることが出来なかった。人口が、半分以上に減ってしまったので、彼らは、それを焼却し、彼らは自慢の村を放棄し、そして、Niobrara や Loup 川の川岸の年を渡り歩く、“流浪の民”となったのである。<sup>19</sup>

天然痘と他の流行病によりもたらされた打撃は、いろいろな形で現れた。天然痘は、たとえば、頭痛と、熱と、筋肉痛、吐き気、そして、たとえ、さいなまれた患者が幸運にも生き延びたとしても、彼の顔、手、そして、足には、決して消えないような吹き出物の後が残った。免疫を持っていない患者の死亡率は、(免疫は、事前に前もって曝したり、或いは、ネブラスカの東部では 1830年以後、予防接種が行われた)、75パーセント以上に昇

っていたに違いない。高い死亡率が、インディアン達の生活手段の活力をなくしてしまい、栄養失調と、栄養不良がさらに、とりわけ、子供達の死亡率を高めた。労働力と活力の喪失で、インディアン達は、毛皮取引の中での貢献が出来なくなっていた。ルイスとクラークが説明しているように、オマハ族は、“取引業者たちから見捨てられた”のであった。そして、“武器と弾薬の不足が恒久的となり”これが、彼らを外敵からの攻撃に対して無力化していた。<sup>20</sup> その結果、彼らの数は、さらに極端の減少していった。インディアンの死、とりわけ、酋長とか、聖職者、そして、医者達が死んでしまったことは、とりもなおさず、それが、文化の記録の中に大きな穴を残してしまった — 理念はもはや分析されることも出来ないし、また、儀式も遂行できなくなっているし、様々な知識が失われてしまっている。

精神的な衝撃の深刻さは、1800 — 1801年にかけてのオマハ族の反応からも明らかである。彼らの伝統に従えば、彼らが、生き残りのものの傷ついた姿を見たとき、（この傷ついた姿が、彼らの子供たちまでも引き継がれていくと信じていた）彼らは、戦士たちの一団を送り出し、そして、自分たちは、彼らが考えていた名誉ある方法で死のうと決心していた。オマハ族の戦士達の一団（その中には、大流行から生き残ったもの達すべてが含まれていた）は、彼らの **Omaha Creek** の辺りの、彼らが過去に住んでいた廃墟のあとに再び戻ってくるまで、ポンカ族、シャイアン族、ポウニー族、そして、オトエ族と闘った。<sup>21</sup>

オトエ族、ミズーリ族、ポウニー族、そして、ポンカ族に与えた 1800—1801年の大流行の打撃に関する、やや、記録に乏しい証拠もある。しかしながら、こうした部族のすべてが、ルイスやクラークと接触する前の年代に天然痘でその人口を減らしていた。かつては強大な勢力を持っていたミズーリ族は、絶えず **Sauk** 族や **Fox** 族から、圧迫を受けていたが、これとともに“繰り返し、天然痘の悲劇に襲われ”、オトエ族と合同するしかなかった。同様に、ポンカ族についても、“過去においては数の上でもまあまあのものであった部族の名残”<sup>22</sup> と、ルイスとクラークが述べていた。Pierre Tabeau、彼は、この流域でも最も実績を持った毛皮商人の1人であったが、彼は、**Teton Dakota** の **Brule** 部族と武力衝突をしたほどの力を持っていたポンカ族の衰退は、天然痘によるものだと考えていた。Tabeau は、ポンカ族は、1804—1805年の冬に、“完全に破壊されてしまうことから逃れるために”<sup>23</sup> オマハ族とともに、避難場所探しを強いられたと記録していた。直にもたらされた情報は、ポウニーにはあまり役に立つものではなかったが、しかし、1831年に彼らの代理人の **John Dougherty**、彼は、かなり天然痘についての恐ろしさを知った男であったが、彼が、病気が襲った最後の年は、1798年であったと報告していた。これが、多分、間違いにより 1800—1801年の不幸とされたり、或いは、そうした大流行病が風土病であると間違えられて伝えられていた。<sup>24</sup> ルイスとクラークがポウニー族の数を 1804年に 4800人と推測したのは、彼らが、18世紀の中ごろに維持していた人口の、多分、四分の一程度であろう。

ヨーロッパの衝撃は破壊的ではあったが、その見返りがなかったというわけではない。

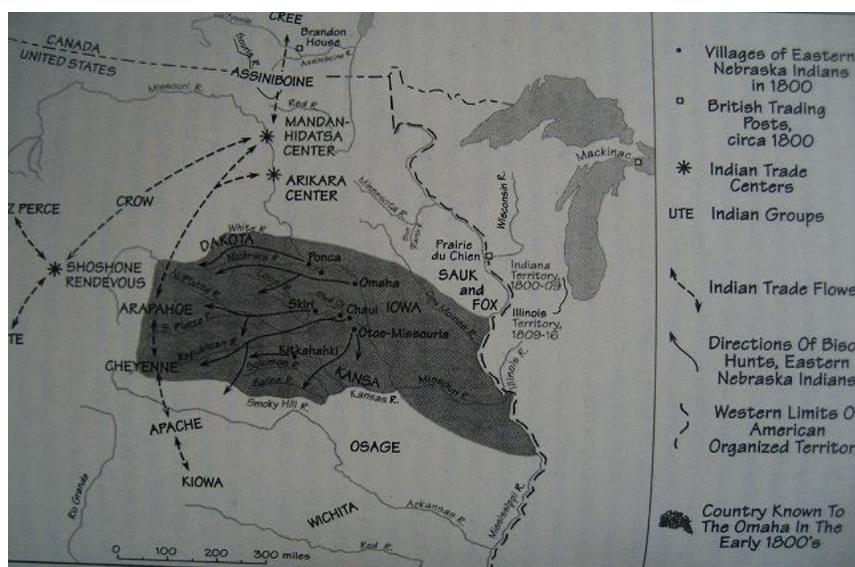
最も素晴らしいのは、ヨーロッパ人が馬をもたらしたこと、これは、取引により、そして、1600年以降のサンタ・フェからの襲撃により広まっていった。<sup>25</sup> ポウニー族は、1714までに馬を手に入れていた。そして、彼らは、オマハ族やオトエ族、さらには、もっと東の部族から多大な利益を甘受しながら、それを絶えず供給し続けた。ポンカ族は、最初コマンチ族から、弓や矢と取替えに、馬を手に入れていた。<sup>26</sup> 馬は、インディアン達の狩猟の範囲、取引、そして、襲撃する範囲を広げ、それまでに使っていた犬とは比べ物にならないくらい効率的に牽引をする手段を提供してくれたので、彼らの生活は非常に楽になった。その上さらに、馬は、ひとりでに繁殖をするので、アメリカ人やヨーロッパ人の手を煩わすことがなかった。勿論、馬が、ダコタ族のように敵を襲撃する地域を広げて行ったし、その結果、ネブラスカの東部地域は、ますます襲撃を受けやすくなっていった。取引により導入されたいろいろなものもまた、生活をよくしていった。とりわけ、日々の重労働を余儀なくされていたインディアンの女達には、恩恵があった。しかしながら、この種の時間の節約は、直ぐに、他の仕事、沢山の毛皮を処理しなければならないというような新しい重労働が余分に課せられることとなった。ヤカン、着物、毛布、赤い染物、ブルービーズ、ナイフ、そして、タバコといったものが、毛皮と交換されたり、或いは、ギフトとして与えられた — これは、インディアン達の伝統的な取引のしきたりからすれば、あまり気の進まない、しぶしぶの譲歩であった。酒もまた取引の主要な対象物であった。とりわけ、簡単に辿りつくことのできたオマハ族とかオトエーミズーリ族の部落には、そうした取引が盛んであった。たとえば、かなりの力をもっていたオマハ族の酋長、Blackbirdは、ブランディーにいて、“かなりのご執心”であったことが知られている。そして、取引商人たちは、自分たちの有利な立場を維持するために、国旗やメダルなどと一緒に、喜んでそれを提供していた。<sup>27</sup> 一方、ポウニー族の酋長は、酒がもたらす社会的な弊害に気付いていて、19世紀の間は、殆ど、それを、自分たちの人々の生活の中に入らないようにしていた。

とは言うものの、インディアン達が一番にほしかったものは、それは鉄砲であった — それは、イギリス製の銃で、— (オマハ族が James Mackay に特定していたように) “彼らの手のなかで破裂してしまったフランス製”のものではなかった。鉄砲の取引は、18世紀の後半に、インディアン達の間での力のバランスを塗り替えることと、そして、取引の取り扱いを複雑化するという形で、主要でない武器の扱いと言う形で始まった。それぞれのインディアンの部族は、毛皮の取引から、敵対する部族を除外しようとし、彼らを鉄砲の供給元から遠ざけようとしていた。1780年代の間、カンザ族は、スペイン人の商人が、ミズーリ川の流域に入ることを妨げ、彼らの敵でもある、オトエ族やポウニー族に武器が渡らないようにしていた。取引商人たちは、結局は賄賂をつかい、1790年代には、贈り物を持って、最初は、オトエ族とだけ、そして、その後は、オマハ族や、ポンカ族と接触するために川を遡ってゆき、川を封鎖し、鉄砲の取引を独占しようとした。1800年に、取引商の Jacques Clamorgan は、オマハ族の酋長達ばかりでなく、“すべての部族”の、有力者

達にたいして、“相当量の貢物”を差し出すかわりに川を開放するように要請した。<sup>29</sup> この出費を避けるために、取引商たちは、こっそりと上流に入ろうと試みたが、インディアン達は警戒を怠らず、通行料の支払いを請求した。1800—1801年の冬の天然痘が発生したときのように、しばしば、敵愾心が爆発し、オマハ族がスペインの取引商のグループを襲撃し、双方に沢山の死者がでた。

オマハ族は、イギリスのほうからスペイン人の取引商たちを攻撃するようにそのかさされていた(セント・ルイスにいたスペインの統治官は、その様に信じていた。):インディアン達のように、ヨーロッパ人たちは、毛皮の取引を自分たちの政治的な野望のために使っていた。セント・ルイスから離れた場所を統治しながら、スペインは、イギリスの攻勢に対抗して均衡するための防御的施策として、1790年以降、その勢力をミズーリ川の上流まで広げてゆこうと考えていた。平原地域を基盤にして活躍していたイギリスの商人の du Chien と Mackinac は、オマハ族、オトエ族、そして、ポウニー族の部落を、1790年代の前半に毎年のように訪れた。(fig. 2) オトエ族は、1791年には、ミシシッピー川にあるイギリスの取引所に向かって、東に旅をさえしていた。イギリスもまた、ブランドンハウスや、カナダの Souris, Assiniboine, Qu'Appelle そして、Red Rivder 沿いにあったそのほかの取引所から、定期的に、マンダン族やアリカラ族などのミズーリ川上流のインディアン達と接触していた。スペインは、こうした、安く、そして、優れた商品をもったイギリスが、ミズーリ川周辺の取引を仕切るようになり、やがて、間違いなく、彼らの北アメリカ領地のまさに中心であるサンタ・フェを脅かすことを恐れていた。さらに、アメリカ人の人口の急激な増加、ならびに、イリノイやミズーリといった西部辺境地への移住(それは、ヨーロッパ系のアメリカ人たちの辺境地への入植の波を指している)にもますます神経をとがらせていた。<sup>30</sup>

1803年、これはフランスが、1800年にスペインからルイジアナを取得し、その広大な領地を合衆国に売却した年であるが、その年の四月に地政学的な勢力図ががらりと変わった。フランスとスペインの取引商たちは、依然としてセント・ルイスの毛皮取引にも姿を



を見せていたし、イギリスの探検家や取引商たちも、なおミズーリ川の上流に居座って居たが、その時以来、合衆国が、ネブラスカ東部のインディアン達の運命を決める者になっていった。

Fig. 2 遠方地域との交流の状況 およそ1800年頃

## 伝統的な生活習慣

### 宗教、場所、そして、環境

宗教は、伝統的なインディアン達の生活の源泉そのものであった;そのほかのものもまた、社会の構成から、毎日の仕事の遂行にいたるまで、すべてのものが、そこから流れ出ていた。たとえば、Wakon'da、これは、まさしく神秘的なもので、オマハ族の誕生の物語のなかに全体に行き渡っている神通力のようなもので、これが、男性の一团を空に、そして、女性を大地に配置することで、生命創造の過程を始めた。この二元説は、オマハ族の社会を二つのグループ、一つは、空の人々( In'shta'cu'da )、そして、大地の人々は、( Ho'nigashenu )に分割する中に象徴されていた。オマハ族に伝わる二つの神聖なパイプは、この二元論的な社会を象徴している。少なくともこの理論においては、そのグループの中のもの、彼らのグループ以外のもの、ただし、おなじ村の中のものとは結婚していた。このようにして、最初の空と大地のグループを維持しながら、比較的小さなグループのなかに、生命科学的な広がりを出るだけうまく実現するようにしていた。Hu'thuga の空間的な組織ですら、バイソンの狩猟のときのキャンプとか、或いは、宗教的な機会の間は、オマハ族の持っている宇宙観のようなものを繁栄していた。その hu'thuga はいつも、一つの輪の中で、象徴的に、もしくは、実際的に東のほうに面した状態で構成されていた。生活におけるすべての考え方は、小屋の内部の空間的な配置から、農業とか、戦闘のやり方、そして、バイソンの狩猟にいたるまで、厳格な宇宙の規則性が存在していた。<sup>31</sup>

勿論、ネブラスカの東部のインディアンの部族の間には、宗教的な重要性や、儀式上の表現の仕方に目立った差があった。その一番よい例は、ポウニー族と他の部族との間の、彼らの言語学的な別々の類似性（スー語に対抗するカド語）、地形的な背景（中西部に対する南西部、あるいは、大平原）といった違いを反映したものである。自分たちの回りで農場をしながら、大平原長い伝統を持っていたポウニー族は、何処に言ってもトウモロコシをあげていた。一方、オマハ族、オトエーミズーリ族、そして、ポンカ族は彼らが西に移っていくに従い、トウモロコシを次第にバイソンの下に置くようになり、狩猟にもっと重要性をおくようになっていた。ポンカ族の宗教的な生活習慣は、彼らがオマハ族から分れて行ったときに、神聖な聖像とか、重要な儀式の知識などを後に残して、切り詰められていった。しかしながら、ポンカ族は、雨を呼んだり、草の生長を祈る儀式のサン・ダンスを（おそらく、これはダコタ族から）受け入れていったが、こうしたものは、他のネブラスカのインディアン達の間では、何処も実行していない儀式である。一方、オトエーミズーリ族の宗教的な体系は、彼らの伝統の多くがすでに忘れ去られてしまっており、あまり良く知られていない。1935年に、人類学者の William Whitman が、彼らの保護居留区を訪問したときに、彼は、ある老人から、次のようなことを話された。“お前さんは、ここに来るのに 50 年遅すぎたよ”と。いまだなお、蘇った出来事が、社会的にも、また、宗教的にも、スー語を話す人、オマハ族、そして、ポンカ族に非常に近い人達にも啓示を与えている。オトエ族のバッファロー組の酋長である Richard Shunatana は、1922年に、

彼についてきた人たちが去った時代に、“彼らの創造の神が、来る日も来る日も、いつも、彼のことを、導きの人、そして、守り神と呼んでいた”ことを思い出していた。<sup>32</sup>

ポウニー族の中でも、宗教信仰の中に顕著な違いが見られた。**Skiri** 族は、原住民アメリカ人の中でも最も複雑な宗教的な体系の一つを保有していた。そして、その信仰のなかに見られた体系というのは、星は、神々と亡くなった英雄達が、姿を変えたものであるというものであった。**Skiri** 族のあらゆる儀式というものは、天の動きからやってくる指示によって執り行われていた。南のほうの部族は、超自然の力を持っていると思われる、そして、**Ti-ra'wa** という、ポウニー族が神秘的な生命の力(意味は、“この広がり”)<sup>33</sup> に対して名づけていたものであるが、これと直接的な繋がりを持った動物から彼らの権威を裏付けていた。しかも、**Skiri** 族は、彼らの儀式というものを、興味を持つひとには解放していたのに対し、南の部族は、最初だけであるが、あらゆる人を遠ざけていた。そして、終局的には、ネブラスカに住んでいたすべてのインディアン達の中で、**Skiri** 族だけが、人間の生贄を実施していた。(Morning Star Ceremony)<sup>34</sup>

いろいろ違いはあったけれども、ネブラスカのインディアン達は、その根拠となる確かな考え方は共有していた； 彼らは、ことごとく、“宗教的な共通した言葉の方言”<sup>35</sup> を使っていた。インディアン達は、生命の力、彼らは、それらの回りにはっきりと表れたものを見たり、それらのなかにあるものを感じていたのであるが、そうした力の偉大なる統一力を信仰していた。彼らは、この力は、昼と夜、冬と夏の順番とリズムの源であり、この順序は、宗教的な儀式、そのほかの儀礼で、しっかりと認識され、確認されていかなければならないと考えていた。他の言葉で言うならば、インディアン達は、自分たち自身を継続している創造のなかの参加者であると理解していた。彼らは、この創造のなかのすべてのものが、お互いに結びついていると信じていた。それは、生命の織物みたいなもので、家族を通じて、そして、部族を通じてそれぞれの個人から、自然へと届いているものなのであった。彼らは、こうした体系の中での自分の位置と言うものは、非常に慎ましやかなものと信じており、そして、自然というものを、あらゆるものの繁栄のための考察から生まれた恐怖と思いやりに隣り合うものとして尊敬の念を持って見ていた。結局は、彼らは、自分たちの住んでいる場所、そして、作物を栽培している場所、或いは、狩猟をする場所を、実際的なものと精神的なものを人生の成功のための施策の中にまぜあわせながら、神聖なる手段により探求していた。

全体としての環境は、それがもたらすもの、そして、それを象徴するものに対して、尊敬されてはいたが、ある種の目印のようなものが、ネブラスカの東部の神聖な地図の上に目だっていた。墓地は、亡くなった人の魂が何時までも残り、そして、残った人たちの運命を左右する場所として、近寄り難い場所であった。イギリスの自然学者 **John Bradbury** のような部外者でさえ、インディアン達の墓地に対する畏敬の念を理解していた。1811 年の 5 月 11 日、入植地の様子を良く見ようと、オマハ族の部落の裏にある丘に登ったときに、彼は、ことごとく自分の周りを取り巻いている“沢山の塚、その幾つかは、まだ新しいも

のであったが、”その墓地の中に立っている自分に気がついた。彼は、直ぐに、彼らの、“崇拜……彼らの先祖のお墓に対する”の気持ちを理解して、その場を去った。<sup>36</sup>

洞穴とか、泉、川、そして、丘といったような、ある決まった物理的な形のもので、インディアン達の神聖な地理のなかで際立っている。こうしたものは、よく、超自然的な場所として理解されてきたし、また、それらに近づく時には、すべからず、戦慄の思い出でそれがなされていた。たとえば、サウス・ダコタの **Clay County** にある **Spirit Mound** は、ダコタ族、オマハ族、そして、オトエ族などは、そこが、非常に遠くからでも死をさいなむことの出来る“悪魔の住処”であると考えて、ここに近づこうとしなかった。<sup>37</sup> ポウニー族が神聖な場所として考えていたところは — 場所としては、わずか、5ヶ所であるが、14の場所が確認されている — **nahy'rac** の小屋、この大地の神々の化身である超自然の動物達なども含まれている。こうした動物達は、とても恐ろしがられており、人を殺す能力をもっているが、しかし、病気を治すために力を授けたり、占いの技を披露したり、さらには、危害を加えることなどもできた。こうしたものは、動物にちなんで名前がつけられた神聖な呪術の組織に、或いは、自分たちの力を引き出すもととなっている動物のグループに組織化されていた、特別の人たちが有する技能であった。こうした神聖な場所は、靈感が探求されたり、貢物が、**Ti-ra'wa** に差し出されたりする聖地巡礼の場所でもあった。その中でも最もよく知られた場所、つまり、最も偉大な力をもつ **Nahu'rac** の家は、**Pa'haku** であった。ここは、今日の **Fremont** の町の反対側にある、**Platte** 川が南にひろい川幅で大きく湾曲しているその崖にあった。ポウニー族の一つの場所 — カンザスの **Solomon River** 辺にある **Spring Mound (Kicawi:caku)** を除いて、— 他の神聖なる場所はすべて、**Republican** 川と、**Loop** 川の間位置しており、ネブラスカの東部の祖国としている場所と何らかのほかの関係を持っている。<sup>38</sup>

ルイスとクラークは、この自然との共存の関係を正当に評価することが出来なかった。(多分、彼らは、1804年でも、ジェファソン大統領は、東部のインディアン達を偉大な平原に移住させようという考えを心に抱いていなかったもので、希望的考えをある程度を披露していたのであろう。) 彼らは、ネブラスカ東部のインディアン達は、“どんな地域も排他的に所有しようなどという考えのない”ことを、彼らの結論としていた。<sup>39</sup> このことは、個人的に土地の所有者となるというヨーロッパ系—アメリカ人の感覚にしてみれば、大筋では間違いではない。がしかし、それぞれのインディアンの部族は、自分たちの土地が、彼らに独自の特別な根拠地であるということに非常に深い関係を持ったものであると考えているという点において誤解をしていた。彼らの歴史は、人々に、後世に伝えられる人物とか、功績、靈感、そして、惨事などにちなんで名前がつけられた場所として、彼らの地形の景観の中に刻み込まれていた。後に、ここに来た、あるいは、ここにしばしばやって来た、沢山の入植者達とは違い、ネブラスカのインディアン達は、深くその場所にかかわっていたのである。かれらの月に対する名前は、何処でも使われているようなものではなく、それぞれの年の成り行きを支配している地域的な環境の中の変化を表して

いた。(table 1)

Table 1 Omaha, Otoe–Missouria, and Ponca Calendars

<i>Month</i>	<i>Translation of Onaha Name</i>	<i>Translation of Otoe_ Missouria Name</i>	<i>Translation of Ponca Name</i>
January	When the snow drifts into the tents of the Honlga	Mating of the raccon	Snow thaws
February	The moon when the geese come back	Month of the waterfrog	Moon when the ducks come back and hide OR Water stands in ponds moon.
March	The little frog moon	Month of doing nothing	Sore eyes ( because of snow glare )
April	The moon in which nothing happens	Plow month	Rains
May	The moon in which they (the tribe)plant	Sprouting month	Summer begins
June	The buffalobulls hunt the cows	Cultivating month	Hot weather begins
July	When the buffalo bellow	Mating of the bison	Middle of summer
August	When the elk bellow	Bellowing of the elk	Corn is in silk
September	When the deer paw the earth	Deer's wallow frosted	Moon when the elk bellow
October	When the deer rut	Mating of the deer	They store food in caches
Novembwer	When the deer shed the antlers	Buck's horns broken	Beginning of cold weather
December	When the little black bears are born	Bear etting down	Beginning of cold weather with snow

Sources; Howard, The Ponca Tribe 73–74, Fletcher and La Flesche, The Omaha Tribe, vol 1. 111, and Shunatona, " Otoe Indian Lore " 62

#### 先祖伝来の土地

19世紀初頭のネブラスカ東部に居住していたインディアン達が主張している彼らの故郷である領域は、お互いに重複しているようなところもあり、また、周囲のほかのインディアン達が主張している土地にまで及んでいることもある。(fig.2) Howard の情報によれ

ば、ポンカ族は、彼らの独自の領地として、北側は **White River** から、そして、南側は **Platte** 川までを主張していた。この故郷として主張されている領域の東の境界は、現在のスー市の近くのミズーリ川から、南のほうに **Platte** 川まで、;そして、西側の果ては、はっきりしていなかった。しかし、ポンカ族は、**Black Hills** のもっと先までと信じていた。<sup>40</sup>

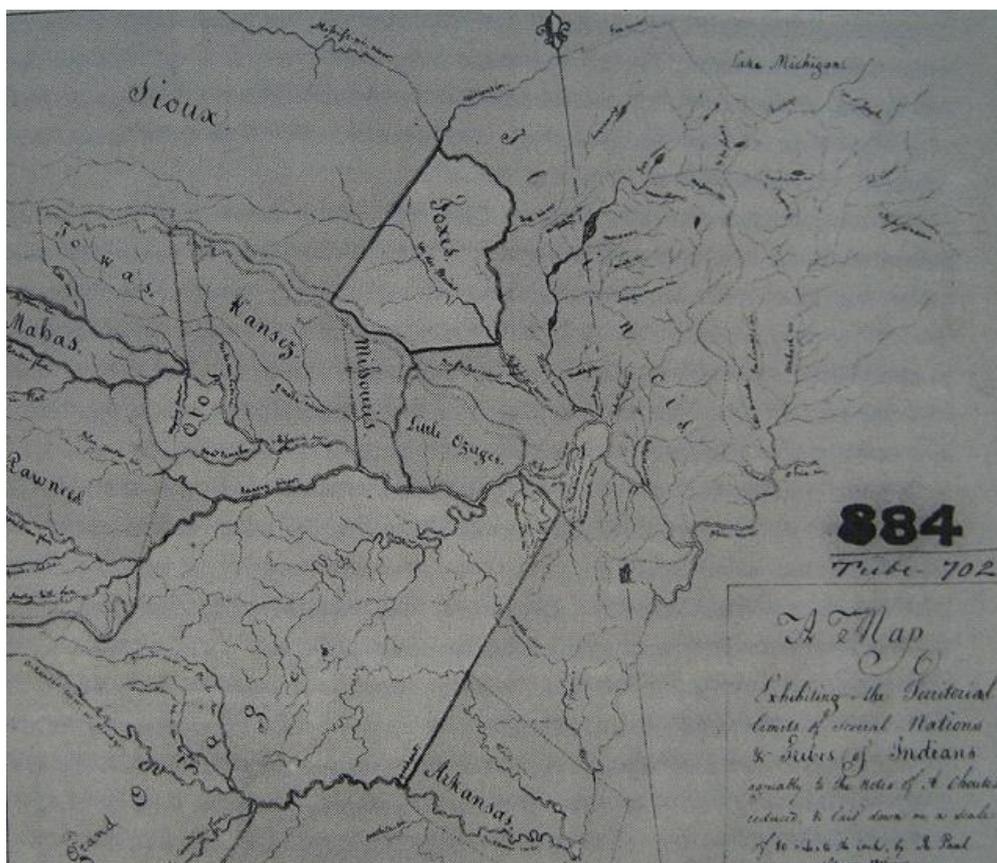


Fig. 3 インディアンの占有地を示した Auguste Chouteau の地図、1816

このかなりの広がりを持った主張は、北の地域では、テトン・ダコタ族がしていたのと同じように、オマハ族やポウニー族から異議が唱えられていた。St. Louis の取引商の Auguste Chouteau の記憶から 1816 年に描かれた地図では、ミズーリ川から Loup 川にいたるまで、或いは、“ポテト”川 まで、がオマハ族の管理下にあったことを示していた。(fig. 3)<sup>41</sup> 後に、Fletcher と La Flesche が、オマハ族の領域は、東は、ミズーリ川の Niobrara 川の河口から Platte 川の河口まで、そして、南は、Platte 川と、Shell クリークの合流点、そして、西は、Shell クラークから、Niobrara の河口に向かって真っ直ぐに引いた線までと、描いていた。Gilmore は、20 世紀の初頭にオマハ族の年寄りの情報をもとに描いた地図では、この領域は、North Loup の水源のほうまで、西にずっと広がっており、Niobrara 川にいたるまで北に延びた境界線までであったと論じていた。<sup>42</sup>

この Sand Hills の地域は、その地域についてはオマハ族が所有権を持っていると知っ

てはいたようではあるが、ポウニー族もその主権を主張していた。オマハ族の管理官が、ポウニー族がオマハ族と一緒に**Sand Hills** でバイソンの猟をするときには、ことごとくその遂行の指示をしていた。(これは、**Fletcher** と **La Flesche** によるもので、彼らは、19 世紀の前半期においては、“たびたび”、そのようにしていた。) ポウニー族でも、さらに勢力のある人々の場合には、オマハ族のこの主張に対してより容易に対抗することができたが、しかし、彼らの意図はもっと南のほうに向いていた。**Chouteau** の地図は、彼らは、アーカンソーへと通ずる道の殆どすべてを主張していたことを示しているが、この主張は、コマンチ族、シャイアン族、アラパホ族、そして、カイオア族などから、激しい異議が唱えられていた。オマハ族、ポウニー族、そして、カンザ族などによりがんにがらめにされていたオトエーミズーリ族は、ネブラスカの南東部にある **Big Blue** 川の東側と、**Nemaha** 川の北の地域にある中心地域に、殆ど縛られていた。しかしながら、彼らは、**Platte** 川の北側、ミズーリ川と **Elkhorn** 川の間土地の細長い部分の所有を主張していた。<sup>43</sup> **Chouteau** が、なぜ、1816 年には自分たちのもともとの土地にいたミズーリ族が、18 年後にオトエ族と一緒になったということを示したかは、はっきりしていない。(fig. 3)

四つの部族が、バイソンの狩猟地として共有していたあちこちの土地を彼ら独自の領地として主張していた。人口の密度が低く、そして、広大な土地の基盤が損なわれていない限りは、彼らは、お互いに重複した主張も受け入れるだけの余裕があったし、境界に対する意識は、なんの問題もなかった。しかし、インディアン達の土地が、後に、19 世紀に合衆国政府に譲渡されるときになり、そして、こうした譲渡が、20 世紀における所有権裁判の論点になると、インディアン達のもともとの領地の正確な広さが係争の対象となった。

領地として主張された土地が、重複している ということ、きちっとした境界があったという概念を忘れることが、そして、インディアン達の領地というのは、村の中心とは別に、猟をする地域も含め、商取引をしに、あるいは、他の部族を襲撃したりする、ずっと離れた、周辺の地域までも考えているような、領地というよりもっと別のものであると考えるほうが賢明であるといえる。このように表現すると、領地と居住地(これは、インディアンが、一年を通じて住んでいる場所と言う意味である) は、同義語なのであった。村の中心地は、村を含め、農地、そして、主要な神聖な場所などであるが、これらは、決して、敵の部族の襲撃を免れるというものではなかったが、別のものであった。重複した形の狩猟の地域というのは、場合によっては共有されていた。そして、しばしば、競争も行われた。そして、商取引とか襲撃といった活動が、ネブラスカの東部に住んでいたインディアン達を他の人が住んでいた地域、**Rio Grande** のスペイン人たちの入植地から、ミズーリ川の上流に住んで居たアリカラ族の地域にまでも駆り立てていた。1800 年以後は、ミズーリ川の東側に領地を広めたり、或いは、そこで活動するということは殆ど見られないが、オマハ族や、オトエーミズーリ族は、アイオアの西部の地域の歴史的な所有権を主張し、しばしば、その地域に猟に出かけていた。一般的には、村から見て、重要な方角は、南と西であった。

## 村の生活

インディアンの領域の中心にあり、そして、インディアン社会の組織は村に在った。その村は、一般的には、河岸段丘にあり、肥沃な土壌の低い平地と樹木、そして、水が簡単に手の届くところにある洪水のときの水位より、高いところにあった。一方が川で、その対岸が崖という状況が防御に都合が良かった。沢山の村が、一ポンカ族のものや、ポウニー族の殆どのもので、一敵の襲撃に対しての防御としてさらに、土の壁で取り囲まれていた。墓地は、住居の全体が見渡せるような高台にあった。村は、ある場所の樹木が使いつくされたり、彼らの住居地が不衛生になったりすると、普通、10ヤードとか、20ヤードといった、少しの距離ではあるが、移動していた。<sup>44</sup>

村の景観は、Fletcher と La Flesche's の言葉を借りれば、“これはというようなものは殆ど”なかった。<sup>45</sup> その光景は、丁度大地からハンモックのように立ち上がった、沢山の円形の土作りの家で占められていた。そうした、殺風景な状況は、時により小屋の間に点在して立てられたティピーにつけられた飾りでやわらげられていた。住居の並びは、非常に親しい親戚や友達は、お互いに近くに家を建てる傾向にあったが、これと言って定まった規則があったわけではない。しかしながら、それぞれの小屋には、決まった方角というものがあつた：ドアは、まんなかの広間から廊下のような場所に沿って導くように、東に面して、付けられていた。これは間違いなく、宗教的な意味合いを持っていた。と言うのは、東という方角が、毎日の復活の方角であり、そして、小屋に最初に差し込んだ光が、西側の壁の近くの祭壇に当たるようになっていたためである。しかし、ドアが東に向いているということは、ポンカ族の老歴史家である Peter Le Claire が人類学者の James Howard に 1950 年代の初頭に話していたように、朝の太陽のぬくもりを捉えるのに都合がよいこと、そして、風が広がっていくことをそらすという実利があつた。<sup>46</sup>

土作りの家に関する一番初めの記述の一つは、John Bradbury によってなされた。1811 年の 5 月の初めに、Bradbury と取引商人の Ramsey Crooks (彼は、自分の責任で取り扱う毛皮を収集しようとしていた。)が、Platte 川と Elkhorn 川との合流点の近くにあるオトエーミズーリ族の村を訪ねた。この村は、Platte 川近くの“くだり坂”になったところにあつたもので、その近くの土手という土手は、“木が全く生えていなかった。”インディアン達は、丁度バイソンの狩に出かけていたので、Bradbury は、全く空っぽの村に入っていた。そこで、彼は 44 戸の小屋を見つけた。彼の観察によれば、それぞれの小屋は、直径が 40 フィートで、ざっとみたところ 12 フィートの長さの廊下がついていた。小屋に通ずるドアの通路は、正確な順序で建てられた杭で閉ざされていたので、どんな進入があつても分かるようになっていた。このドアに通じる通路が閉ざされていない一つの小屋を見つけたので、Bradbury は、掘り下げられた床にゆるやかに下っていく入口を通して中に入っていた。その小屋は、中心辺りに四本の大きな柱と梁でつながれた、15 本の外側の柱によって支えられていた。小さな棒を横にわたし、その上に土芝、そして、土を乗せて屋根

を作っていた。<sup>47</sup>

Bradbury により説明されたオトエーミズーリ族の土作りの家は、基本的には、ネブラスカの東部に住んでいたほかのインディアン達の部落でも使われていたものと同じようなものであった。<sup>48</sup> 大きな柱は、ニレの木を切り出したもので、また、その樹皮は、剥がされて、水につけられ、それぞれの柱を結ぶのに使われていた。屋根を葺いた材料は、柳の木の小枝で支えを作り、この上に大きな青茎の草を並べたものだった。<sup>49</sup> その半世紀後に入植した者達の芝土と同じように小屋は、実用的であり、また、良い機能を持っていたが、直ぐにノミやそのほかの害虫がはびこり、そんなわけで、その寿命は、短いものだった。

インディアン達が、彼らのそれぞれの土作りの家に住んでいたのは、一年の半分以下で、残りは、夏や、秋から冬にかけてのバイソンの猟をして過ごした。それでも、村と言うのは、最も重用な儀式の行われる場所であり、一年の食料の大半が収穫される場所であり、そして、先祖の埋葬されている場所だった。そういうわけで、村と言うのは、社会の基本的な単位でもあつた。つまり、一つの“地理的に境界の設けられた、非常に大きな広がりを持つ家族”というものであった。<sup>50</sup>

村の社会的な単位は、家族のつながりのネットにより、そして、相互の義務と責任により、さらには、常識的な伝統、習慣、そして、会話などにより、また、周りの部族に対する統一的な対処の仕方などによって保たれていた。たとえば、オマハ族の場合、村の中の二つの集団(Sky と Earth の人々)が、父方の系列で子孫につながっていた五つの血族関係を含んでいた。両方の集団とも(そして、彼らの神聖なパイプ)、どんな会議にも、或いは、どんな取り決めの合意でも、代表でなければならなかった。それぞれの血縁関係集団は、独自の、二次的な分派を持っており、断食をし、宗教的な儀式、そして、毎年繰り返される儀式のなかでの特別な役割をもっており、それぞれは、若い頃に少年達に対してとりおこなわれる特殊な髪形により区別をすることができた。こうしたものはすべて、“壮大な血族関係による社会”を形成するために部外結婚の実現を通して、成し遂げられていた。血族関係の中での結婚を統治する規則は、とても厳格なものであり、かつ、込み入ったものであった。そして、それは、遠くとの血縁関係を維持するように作り出されたものであった。ポンカ族は、7 から 10 程の血族がいたが、やはり同じような社会的な構造をしていた。同様に、オトエ族は、Whitman への情報の提供者の話しによれば、“一つの部族”ではなく、むしろ、“それぞれが独自の特権と、社会制度、そして、独自の超自然的な由来を持った 10 程の血族集団の連合体”であった。しかしながら、すべての血族集団は、村の行事をする際には、お互いに一致協力をしていた。<sup>51</sup>

ポウニー族の村の包みとか、オマハ族の神聖なタバコのパイプや、神聖な杖などというような宗教的な象徴は、それぞれのインディアンの集団を区別することに意を注がれたものであった。村の包みは、バイソンの毛皮に丸められて包んで置かれた、儀式と、象徴的なものを入れた、移動する神社のようなものであった。そのひとつ一つが — Shiri の集団だけでも、12 の包みがあったといわれているが — 酋長の小屋の西の壁のところ

保管されていて、酋長の妻のうちの1人がいつも、その面倒を見ていた。それらの包みは、村人と神との間の、それぞれの村に独特の歴史をもたらした超自然的なものとの最初の遭遇を再び呼び起こす、村人の神との間のやり取りを代理するものであった。一年を通して、如何なる重要な活動も、その中の特殊な包みの力により裁可されていた。この儀式の権威付けと言うものは、1つの包みから順に代わっていった。つまり、1人の酋長から別の酋長にというように、従って、このようにして、政治的な力や責任のバランスというものが維持されていたのであった。<sup>52</sup>

この包みのシステムというものが、オマハ族やポンカ族、そして、オトエーミズーリ族の社会にも、あまり進化はしていなかったが存在していた。しかし、後の二つの部族には、二つの神聖なタバコのパイプが、そして、オマハ族では、神聖な杖が、酋長に彼らの権威を与える一方で、神からの力に近づくことを許し、そして、自分たちには、彼ら自身の特徴を与えていたのだった。特に、神聖な杖は、2.5メートルほどの、表面が荒削りのポプラの細長い木で、オマハ族の者達の統一を象徴していた;彼らに伝わる伝説によれば、それは、“Wacon'daからの授かりもの……それは、人々が団結を保つことを助けるもの”であった。オマハ族の暦のなかで、夏の終わりごろに執り行われる最も重要な儀式で、この神聖な杖は、その権威のしるしと、狩がうまくいったことに対する感謝として、バイソンの肉とともに、塗油により清められていた。<sup>53</sup>

身分を識別し、貴族的な規律を特徴とした階層化した社会が存在した。そうした社会の制度の一番上には、世襲的な酋長と僧侶がおり、前者は現世の様々な出来事を上手に取り仕切ることを担当し、後者は、儀式と神の力の利用を管理していた。そのほか、高い地位にいたものは、戦士達、呪術者、そして、弓矢職人であった。そのほかの者達は、(ならびに、その家族)、およそ、部族の半分の者達であったが、彼らは、生まれつきや、特別の、或いはまた、技能がないなどの一般の人たちで、地位も低く、また、力もなかった。<sup>54</sup>

19世紀の観察者達によって描かれた絵の中では、ネブラスカのインディアンの女達は、虐待され、過重労働を強いられ、踏みにじられ、そして、何の力もなかったと描かれていた。インディアンの男達は、“すこぶる怠惰”の生きた生命として特徴付けられていた。これに対し、“部族のなかの苦役”はすべからく女達によって遂行されていた。<sup>55</sup> Reverend John Dunbar (彼は、1834年から1846年までポウニー族と一緒に暮らしていた。)のよう、長いことインディアンと一緒に生活したい者でさえも、女は、“まるで奴隷”で、一方、男達は、“どうしようもない怠け者”であると認識していた。Dunbarは、“生活……いつも疲れきっている生活様式”が、女達を実際の年より老けさせており、60歳を過ぎて長生きしている者は殆どいないと述べていた。当時のアメリカ人にとっては、このことが、女達の虐待は、インディアンが文明化されていないことの証であると主張し、そして、インディアンの男達と女達の夫々の役割を入れ替えることが、19世紀を通して、アメリカ合衆国政府の政治的な主眼であった。

この、インディアンの女達に関する役割と地位についてはびこっていたアメリカ人

のイメージは、主として二つの先入観によりゆがめられていた。まず、第一のものは、初期の旅行者（彼らの考えをまとめた少なくともある程度の教育を受けたもの）達は、彼ら独自の、女達は引き込むべきもので、そして、守られているものであるという文化的な仮定によりぼやかされていた：アメリカ人社会について、Alexis de Tocquevilleが“とりわけ依存性の立場”のなかで、観察しているように、そのように認識されていた。<sup>56</sup> その理解は、女と言うものは精神的にも、また、物理的にも弱い性であるというものであった。第二には、これと結びついたものであるが、先入観は、きつい物理的な仕事は、低い立場のものの仕事と同じようにみなされ、誰一人、インディアンの女達よりも一生懸命に働こうとはしなかった。インディアンの女達の低い立場についての信仰は、男達の政治的な、或いは、宗教的な立場を独占することによっても確かなものとなっていた。

インディアンの女達の生活が、日々の骨の折れる仕事により、大変きついものであったということについては何ら疑いのないところである。<sup>57</sup> 女達は、ティピーの組立てや解体、小屋の組み立てやその修繕、主食となるトウモロコシの栽培、野生の食料植物の収集、燃料や水の運搬、塩の採取や運搬、布や毛皮の加工処理、子供達の誕生や養育、そして、

**Table 2 Men's and Women's Responsibilities and Activities**

<i>Men</i>	<i>Women</i>
Political decision making ( chiefs )	Day-to-day decision making in lodge.
Sacre matters ( priests )	Child-rearing ( mothers and grandothers )
Medical/supernatural matters ( doctors )	Ownership of lodge, tipi, and household property
Military prodection and raiding ( warriors )	Assistance in ceremonies
Hunting	Care of religious items
Manufacture of weapons	Virtually all farming (clearing the fields,planting, hoeing, harvesting) Virtually all wild plant collection
Minor assistance in fields	Food storage and processing ( care of cache pits )
Car of horses ( mainly by boys )	Hide and skin processing and manufacture ( clothes, tipi cover, etc.) Construction and dismantlement of tipi Construction and repair of lodge Household maintenance ( cooking, dishes, haulage of water and fuel, etc.) All household crafts except weapon making ( quill work, pottery, stonework, and woodwork) Haulage of possessions, including sacred items, on bison hunts and , occationally, on raids

日常の家事仕事一切の取り仕切り（Table 2）などをしていた。事実、この重労働というのは、19世紀に、毛皮の取引が衣料の材料として盛んに行われるようになると、ますます、きついものになっていった。インディアンの女達が、社会全体にわたり、政治的な力に欠き、そして、儀式的な生活の中で従属的な役割を演じていたということも事実である。彼らは、公的な事務所のようなものを持っていただけでもなく、また、神聖な組織に参加をすることはあったが、そんな時でも男達よりもより、重要でない仕事に携わっていた。ただ、あるポウニー族の儀式 — Skull Bundle という集団のトウモロコシの栽培の儀式であるが — ここでは、女達が主役を演じていた。そして、この儀式の中でさえも、儀式の進行は、男の僧侶の指示のもとで実施されていた。インディアンの男達、女達ではなく、彼らがアメリカの政府との契約とか、年金の支払い、そして、配給の分配のときでも、彼らの組織の代表であった。この役割というのが、勿論、インディアンの優先権を取り扱うときと同じように、アメリカ人としての基準についても現れていた。

しかし、小屋のなかにおいては、あるいは、そのほかのものについても、女達は、権威と尊敬の立場にあった。ネブラスカに住んでいたあらゆるインディアン達のなかで、女達は、家、ティピー、そして、その中の家財道具についての所有者であり、19世紀の半ばまで、アメリカ人婦人のもっていなかったその所有権というものを持っていた。そして、彼女たちは、農場と、種と、そして、そのための道具一式の所有者でもあった。彼女らは、バイソンの狩に行くときには、いつもキャンプをする場所を決めていたし、また、その血縁関係の集団の相互関係のなかで、何処に夫々のティピーを設置するのかという序列も決めていたのであった。年老いた女が、小屋の中の配列を決め、そして、食料の分配を管理していた。女達は、自分の親が決めた結婚相手の男を拒絶する権利も持っていたし、また、離婚することさえ出来た。彼女達は、余分な食料を生産するというようなことも含め、村の生活のいろいろな出来事の中で演じている基本的な役割を非常に重視されていた。彼女達は、彼女達が衣類、布、パイプの柄、そして、社会的な地位を得、そして、それを堅固なものにするための贈り物として他の人達と取引をしたり、あるいは、贈ったりする、様々なものを生産するというわけで、自分たちの夫の社会的な地位（したがって、家族の地位と言うことにもなるが、）の維持にとっても重要な責任があった。ある女達は、とりわけ、木製の入れ物やスプーン、ティピーの覆いの製作など、彼女らのものを作る技量というものを非常に重く評価されていた。そして、彼女達は、自分の持っているこうした加工技術の重要なノウハウを教える代わりに代償をとり、家族の富を蓄えていた。女達は、そのほかにも、治療、とりわけ、赤ん坊が生まれるときなど大切な役割を果たしていた。オトエーミズーリ族では、少なくとも、女達は、医者組織の一員として加わることもできた。結局、彼女達は、宗教的な出来事の面倒を見るという責任、これは、最も高く、重要な責任であるが、それを持っていたのだ。

男達は、狩猟、防護、或いは、襲撃のような戦闘行為、兵器の製造、そして、殆どの儀式や村社会の政治的な事項の決定におもな責任を持っていた。労働の分担は、いくらか

自由度があった：男達は、小屋の建設とか、或いは、農耕のために土地を整地するといったような重労働のときには、手助けもしていた。そして、村を守るために女達が手助けをしたなどという例は沢山あった。そうした役割の相互の補完の習慣、そして、腕のたつ狩人と同じように、上手な農耕者であるということについてくる高い社会的な地位についての認識は、19世紀初期の旅行者達によって見逃されていた。

その世紀の終わりごろになり、最初の民俗学の専門家がネブラスカのインディアン達について研究をしたときに、もっとずっとバランスのとれた姿が明らかになってきた。たとえば、Owen Dorsey、彼は、ポンカ族やオマハ族と1870年代にともに暮らし、一緒に働いていた人であるが、彼は、“女達は、社会の中では男達と同じ立場にあった。”と、そして、“いつも、自分自身の自発的な決断によって行動していた。”結論していた。さらに、彼は、“亭主は、男は、必ずしも、いつも何もしないというわけではなかったもので、労働に一部を共同で働いていた。”と、付け加えていた。責任と、社会的な立場のこうしたバランスは、インディアン達の人口統計学のはっきりとした事実から得られたものである。狩猟とか、襲撃に伴う危険性から、男達は、女達よりもずっと多くのものが死んでおり、しかも、若くして命を落としていた。そして、その世紀の殆どについて当てはまる、幅の広い年齢層での男女間のギャップという結果を導いていた。そうした社会には、独身の男性がいたが、一方、Dorseyが、“供給よりも需要のほうがずっと多かった”と言っているように、結婚していない女性は、殆どいなかった。<sup>58</sup>

階層分けの体系は、村の形態的なもののなかの情景に現れていた。探険家の Stephen Long は、1819年にポウニー族の村で、夫々の小屋は、“構造的には非常によく似ているが、その大きさが違う”と言うことに気がついた。<sup>59</sup> 酋長と、そのほかの指導的な人達の小屋だけが、中心的な家を建てるのに必要な沢山の労働力を動員するための信望を集めることができた。酋長の家族、この中には、祖父母や、様々な一時的同居者と同様、一般に、沢山の妻とか子供達も含まれていたが、この家族が一般の家族よりもかなり大きなものであったので、(多分、40人くらい) それゆえに、彼らは、規模の大きな小屋を必要としていたのだ。社会的に地位の低い人たちは、小さな小屋、もしくは、ティピーに住んでいた。そして、全く、社会的な地位のない人は、彼らは、殺人といった、社会の慣習を破ったりした人、そして、頭皮を剥がされ、人々から遠ざけられている人などは、村の外れに追いやりられ、そこで、ティピーとか、孔を掘ってそこで生活していた。<sup>60</sup>

こうした身分違いにもかかわらず、どんなものでも手に入る時には、食料なしには、誰も出てゆかないということを保証するような、村の社会の中に、正真正銘の安全網と言うものがあつた。誰でもが、内側のつながりは小屋であり、そして、外側の限界は村であるという血縁関係の網のなかに閉じ込められていた。これは、相互補助の体系であり、ここでは、裕福なものは、食料は、日常生活用品を儀式などで施しをしたり、また、時には、非公式ではあるが、部外者に対してもめぐんでやったりしていた。誰もが、一敵であつてさえも、一食事の時間に小屋に入ってきたものは、食料を共通に施されていた。この

共有という感覚が、集団全体の安全をより強いものにし、そして、施しをする人の社会的な地位を上げていた。こういうことで、雅量の大きさが酋長の人格を明らかにするものであった。次の地位のものは、自分の地位を何とか上げようと考えている一般の人たちで、公の儀式の席で、酋長や僧侶に、しきりに贈り物 — ワシの羽根とか、矢筒、バッファローの毛皮、馬、などなど — を寄贈していた。こうした、貢物は、医者からも、彼らの社会に参入する代価として、あるいは、その知識の見返りとして要求されていた。一般的に、贈り物を差し出すということは、或いは、何らかの食料を共有するということは、将来の安全に対する代価であった。期待は、“見返りの贈り物か、何かの利益に繋がる” というものであった。<sup>61</sup>

村では、インディアン達の生活は、農耕を中心として、日常の生活の茶飯事、これらの活動を通常の平凡なものよりも上に位置づけられた儀式が展開していた。農耕のサイクルは、トウモロコシの種を奉納し、それを植える農地の整備にかかわる儀式が行われる四月に始まった。こうした儀式に、他の穀物は一切出でこないのは、トウモロコシの象徴的、かつ、現実的な重要性の表れであった。Skiri の集団のトウモロコシの植え付けの儀式は、女達の鍬堀や、植え付けの仕草を模倣した、歌や踊りで豊作を祈るというものであった。オマハ族の **Maize Ritual** の歌は、トウモロコシを人間そのものの中に移し、そして、節から節に、順に種から実によく育っていく姿を歌っていた。オマハ族のどの血縁集団も、その植え付けの儀式の中では、全体として夫々の家族を幸運に結び付けるような責任のバランスをとった形で、独自の役割を担っていた。ある集団は、赤いトウモロコシの神聖な穂を保存していたが、他は、夫々の家族に 4 つの鞘のついた実を彼ら自身でその実を育てるように分配した。一方、そのほかでは、彼ら自身のタブーとか典礼の美德により、十分な雨、或いは、トウモロコシを害虫から守るための、超自然の力を呼び寄せるために奉納された。

62

5月のはじめまでに、女達は、整地をし、そして、草木を焼き払い、あちこちで煙が立ち上り、谷中の空を覆っていた。農耕地は氾濫平地に沿って作られていて、とりわけ、侵食により硬い大平原の土の表層がすでに取り除かれたような崖の縁が選ばれた。<sup>63</sup> その大きさは、広さにすると半エーカーから 3 エーカー程度で、その周りを柳の柵で囲っていたり、或いは、大きな背をつくり、ここにひまわりなど植えていた。こうしておく、畑の中に馬が入りこんでくるのを防ぐことが出来たし、また、その土地が使われているあいだ、それがだれの土地であるかを認識することができた。ポウニー族の酋長は、自分の従属者たちに土地を分配しており、村に近い土地は、おおむね社会的地位の高さに応じて順に分けられていた。普通の人たちの土地は、村から離れた、不便なところ、— そして、より危険な場所 — であった。しかしながら、ある家族が村の近くに農地を持ち、そのほかのものが、遠くの土地を持つということは、必ずしも異常なことではなかつた。夫々の村から数マイルにもわたり、こうした“農耕地の広がり”が展開し、殆どの住宅地と農場を結ぶ、よく踏み慣らされた小道で、1820年の夏に Stephen Long により観察された Loup 溪谷の

北側は、完璧に人間の手により作り出された景観を呈していた。<sup>64</sup>

共同で作業をし、家庭の女達は、植え付けの仕事を一週間で完了していた。そして、穴掘りの杖と、骨でできた鋤を使い、土を盛り上げで、狭い間隔で盛り土を作っていた。トウモロコシがまず種まきされた。ポウニー族の場合には、1つの盛り土に四粒の種が、オマハ族の場合には、七粒が蒔かれた。そして、そのトウモロコシの間に、マメが巻かれていたが、これは、後にトウモロコシの茎を垂直な支えにするためであった。最後に、ポンキンと、マメ、そして、カボチャが、種子の純粋を保つために、違ったトウモロコシの列の間に、別々の間隔で植えられた。インディアンの女達は、農耕についての熟練者であり、かつ、完成された遺伝学者でもあったのだ：ポウニー族だけでも、十種類の純粋なトウモロコシと、七種類のパンキン、そして、八種類のマメを持っていた。

植え付けの終わったあと、数週間は、盛り土は、丁寧に雑草をとり、トウモロコシが、紛れ込んできた草木の上に芽を出すように、二度ほど鋤で草取りをしていた。そして、6月の終わりから、7月のはじめにかけて、バイソンの猟に出かけるために村を離れた。そして、トウモロコシは、煮えたぎるようなネブラスカの夏の暑さのなかで、放置されるまま成熟していった。

8月の終わりごろに、大平原の西の地域でアキノキリンソウが花咲く頃、インディアン達は、その頃になるとトウモロコシの実がなり、村に帰る時期が来たということを知った。バイソンの肉を野原で焼いて、新しく取れたトウモロコシを包みに奉納したあと、収穫が始まった。トウモロコシの一部は未だ間取りではあったが、甘く、そのまま食べるか、茹でて、乾燥したあと冬のために貯蔵された。マメ、ポプキン、そして、カボチャの収穫が続き、最後は、十月の初めに、大体的なトウモロコシの収穫が行われた。この収穫の情景は、男も女も野原にでて、柳の枝を積み上げた薪の上で焼いたり、ネックレスのようにトウモロコシに紐を通して足場につるし乾燥したり、女達は、輪になって座り、二枚貝の貝殻でトウモロコシの鞘から実を掻きとり、包みのなかのトウモロコシの神聖な鞘を入れ替えることで、一年の農業の終わりを告げる祝宴と儀式をするなど、とにかく、活気のある、楽しい時節の1コマであった。

1800年までに、バイソンの肉がトウモロコシに代わり、インディアン達の主食となっていた。馬が狩猟と輸送の範囲を格段に広くし、そして、バイソンの肉が一般的に非常に豊富で、好まれた。トウモロコシや、他の野菜などは、収穫の時期に生で食べられるようなご馳走になり、或いは、後で肉の副食物として使われるために貯蔵をされる、臭いのある食べ物のおい消しとして、或いは、交換用の品物として使われるようになった。19世紀のはじめにインディアン達の歓待を受けた人たちは、普通、バイソンの肉、ポプキン、塩、そして、様々な薬草の調味料がたっぷりに入ったトウモロコシのスープ、或いは、トウモロコシと蜂蜜やバイソンの栄養物との混ぜたもののご馳走を振舞われた。一年を通じて、食料は豊富であった。1834年に、たとえば、やせ細っていた John Dunbar は、彼の Chaui の受け入れ家族の主人から、心配されて次のように話された。彼は、“彼らと一緒に生活をし、彼らの食料の、油ののったバッファローの肉を食べているうちに、きっと太るだろう”と。<sup>65</sup> しかし、バイソンの群れは、時により彼らからはずっと離れたところにとどまり、そして、日照りが続き、イナゴやバッタがはびこり、そして、

敵対するインディアンの部族がトウモロコシを略奪し、そのため、毎年毎年、食料の供給に変化が起きていた。こうしたことから、1806年の Zebulon Pike が明らかにしているところによれば、Kitkahahki Pawnee は、“非常に薄いスープを作るだけの”トウモロコシしか育てることが出来なかった。<sup>66</sup>

そして、収穫が良くなかったり、バイソンが沢山現れなかったときには、インディアン達は、最後の手段として、果物、ナッツ、そして、草木を集めて食料としていた。しかしながら、たとえ、食料が沢山ある年でさえ、野生の植物は、主要なものと同様、様々な栄養バランスをとる上で、食料の供給の重要な役割を果たしていた。こうしたなかで最も重要な収集される食物はインディアンポテトであった。この野菜は、川の谷間に非常に沢山生えていて、とりわけ、Loup 川に沿い、大平原の Grand Island あたりまでの砂地によく見られた。女達は、春に大地の雪が解けると直ぐに、この茎を数百ブッシェルも集めていた。そして、その野菜の収集は、秋にバイソンの狩が始まるあとまで続いた。野生のプラムとか、ブドウ、そして、グズベリーといったような、他の植物は、ネブラスカの東部の川の谷間に偏在していた；そのほか、Sand Hill の野生のお米や、オトエーミズーリ族の地域の野生リンゴなどは、食料を集める人たちの気を引くような場所に生えていた。Gilmore の食料倉庫によれば、すべてこれらをあわせると、百種類以上の植物がネブラスカの東部のインディアン達の間で、食料として、薬として、儀式に使うものとして、強精剤として、そして、ガマの綿毛の場合には、優れたオムツとして使われていた。<sup>67</sup>

食べ物を集めるというのは、殆どが栽培に関係していたものであるように、これは、女達により仕切られていた。男達は、局地的な狩猟で、村に食料をもたらすことでこれに貢献していた。鹿とかエルクは、ネブラスカの東部には沢山いたが、これらは、十分に太った冬の時期に取ることが適していた。ウサギとかリスのような小さな動物は、集められた肉が、努力の割には少なかったので、食料の供給が少なくなったときにだけ、狩がなされた。男達は、狩に出ている間は、サンドチェリーのようなご馳走に興味の目を向けていた。男達も、女達も、そして、子供達も、魚とりをしていたが、これは、川にはマスや、カワカマス、バッファローフィッシュ、スズキ、そのほか、様々な魚が豊富にいたので、それほど難しい仕事ではなかった。

68

こうした、非常に広範な恵まれた環境から食料を調達することによりもたらされる現実的な安全があり、インディアン達は、彼らの伝統的な食料を楽しんでいたように思われる。そして、John Mackay は、間違いなく、彼らの穀物の茂みや、彼らの健康的な体格に非常に感銘していた。<sup>69</sup> 勿論、こうしたことすべてが、天然痘や他の持ち込まれた病気により、変わっていったのであろう。しかしながら、天然痘ほど劇的ではないにしても、長い年月の間にひどい打撃を与えたのは、彼らの伝統的な食料の基盤が壊され、そして、それが政府の配給や年金という形で置き換えられたときに、栄養失調により彼らの健康がじわじわと脅かされていったことである。

インディアン達は、彼らの地域的な環境の洞察力のある管理者たちであった。傷つけていったのは、農場は、土地が痩せているときには、草木が自然に枯れて、分解し、土が活力を蓄え

るまで、そのまま寝かせておいた。村の周りにプラムの種が蒔かれ( 或いは、おそらく、捨てられたのかも知れない )、半ば、果樹園のような形のものを作っていた。秋になると、大平原の草は、焼き払われたが、これは、春になって、馬のために沢山の飼料が必要となるときに、しっかりと成長させるためであった。そして、村の周辺にあった沢山のインディアンポテトとたまねぎは、必要以上に収穫されないように気を使っていたことを示している。<sup>70</sup>

しかし、こうした面倒見の良い管理にもかかわらず、あまりにも沢山の人と、そして、馬( ポウニー族の場合、19世紀のはじめに、6,000から8,000頭の馬を保有していた ) が、その地域での食料の基盤の限界を脅かしていくようになったのであろう。家を建てたり、或いは、燃料用に木を必要とすることがますます強くなり、そして、BradburyやLongのように、早い時期にここを訪れた人たちは、村の近くの谷が次第に丸裸になっていくことに気付いた。さらには、草原を焼き払う管理をしているのにもかかわらず、馬を、一年の大半の間、村の近くに保ち続けることができなかった。秋の初めまでに、トール・グラスの草原が、からからに乾燥し、その栄養素がやせ細り、馬に餌を与えることに支障が生じた。これが、バイソンの狩をどうしてもしなければならぬ、そして、周りの環境の状況に論理的に合わせていった理由である：単に、食料や、布、そして、そのほかの材料源としてバイソンの狩をしたのではなく、それらが、インディアン達と馬が村の切迫した環境から一年のうちの七ヶ月もの間、西経 98 度の向こうの、様々な形の大平原に材料の基盤を広げてゆきながら、離れて暮らすようにさせていた。

71

## バイソンの狩猟

ネブラスカのインディアン達は、6月の終わりから、9月のはじめにかけて、そして、収穫が終わったあと、11月のはじめから、3月まで、再び、バイソンの狩のために彼らの村を留守にしていた。夏と冬の狩は、狩猟の場所とか、組織、そして、宗教的な重要性などの点においては、ほぼ共通したものであったが、しかし、この季節ごとの狩には、ある重要な相違があった。夏には、バイソンは、ネブラスカの西の中央部、そして、カンザスの豊富なバッファローグラスの生えているところに散在していた。インディアン達は、普通、バイソンが川で水を飲んだあと、丘に草を食べに戻ってくる頃の、朝のやや遅いときに攻撃した。そして、十分な肉を確保すると彼らは村に戻った。冬の狩の場合、特に、寒さが厳しく雪の多い冬には、バイソンは、Republican川の上流のような森の茂った川の谷間に避難していた。インディアン達自身も(そして、馬も) 生き残るために同じようなことを考えてここに避難していたので、殆ど、思いどおりに狩をすることができた。<sup>72</sup> 夏の狩では、一年間に必要な肉を殆ど確保することが出来た。そして、teshna'ha、これは、オマハ族の言葉で、“毛のついていない皮”の意味で、これは、両面をなめして、モカシンやレギンス、そして、ティピーの覆いに遣うのであるが、これを調達することができた。冬の狩では、meha、これは、雌のバイソンから得られる重厚な毛皮の毛布で、寒さから凌ぐためだけでなく、インディアン達に、動物と人間との

間の密接なる関係を思いださせるものであり、他のものを支えてゆく命を与えるものであったが、これを確保した。<sup>73</sup>

バイソンの狩では、インディアン達の食料のうちの少なくとも 50 頭が調達された。この中には、宗教的な儀式に伴って催される祝宴で消費される、非常に大量の乾燥した肉も含まれていた。<sup>74</sup> バイソンの肉を神聖な包みの儀式で、神に捧げることは、インディアンの宗教的な生活の欠かせない部分であったし、それは、全体を解体することなしには奉納されるものではなかった。毎年、数百頭からのバイソンの肉がこの目的のために僧侶達に与えられた。ある時には、Samuel Allis、彼は 1830 年の後半から 1840 年代にかけて、Skiri 族とともに暮らした John Dunbar に随行した宣教師の 1 人であるが、彼は、インディアンが、“18 頭もの丸々と太ったバイソン”を Ti-ra'wa に差し出すのを、肉は、将来食料として必要になるからと言って、思いとどまらせようとした。このことに対して、彼らの理屈は、“もし、彼らが彼に偉大なる犠牲を払うなら、彼は、狩で彼らにきっと幸運をもたらしてくれるだろうし、彼らは、食料の供給で底をつくようなことはないだろう。”と言うものであった。<sup>75</sup>

また、バイソンは、小屋作りをするための基本の部品を作ったり、衣類、台所用品（たとえば、骨製のスプーンなど）、工作用具（たとえば、肩の骨で作った鋤）、そして、兵器（弓の弦用の腱）といったように、インディアン達の日常的なものづくりの原材料であった。究極的に、狩猟というのは、男達、そして、少なくとも少年達にとっては、単調で、退屈な村の生活から飛び出す機会として、どうしても参加をしたいと願う、気分の高まる出来事であり、スポーツであった。その一方、女達は、彼女達には、厳しい労働が待っているということで、この狩猟の時期をもっと複雑な気持ちで見ている。

狩猟の準備は、実際に出発する数週間前から始まった。狩猟をする者達は、少なくとも、20 本程度の矢を準備する必要があったし、矢作りの職人達は、その要請に応じて、日も夜も働かなければならなかった。女達は、旅に携えて持っていく食料—トウモロコシ、マメ、パンプキン、果物、バイソンの厚切りの肉など、こうしたものは、長い旅にも、持ち運びが便利なように、よく乾燥されていたが、これらを備蓄するための深い穴を掘らなければならなかった。たとえば、ポウニー族の場合には、9 月の後半に彼らの馬を Grand Island に送り、大草原の草を食べさせ太らせていた。19 世紀のバイソンの狩猟には、元気な馬というのがどうしても必要だった：酋長は、20 台くらいの馬の引き具を保有しており、彼の一族郎党はすべからく、これを利用することができた：ただ、殆どの人たちは、引き具は、一台か二台程度で、女達は、歩いて、しかも、重いにも背負って移動をしなければならなかった。勿論、馬を持っていない家族は、年寄りや、病人、そして、狩に参加できない何かの事情のある人たちと一緒に村に残らざるを得なかった。

また、出発前の数週間の間、狩の編隊が組み立てられた。ネブラスカの東部のすべてのインディアナたちのなかで、誠実で、勇気ある男に狩のやり方についてのすべての責任が与えられた。そして、兵士達には指示に従うことが言い渡された。狩の間に個々人の人格が保たれていたポウニー族でさえも、すべての村の酋長達の会議で指名された一人のリーダーが指揮に従っ

ていた。同様に、オマハ族では、統治の主体である **Council of Seven** が、1 人の指揮者、**wathoni**、彼は、**Black Shoulder** という血族の子孫で、かれが、行軍と狩のすべてについての詳細な決断を下していた、を指名していた。これは、もし、狩がうまくいかなかったときに、酋長や僧侶達から責任を逸散させるための仕組みであった。そして、インディアン達が彼らの安寧の村から遠く離れているときに、きちんとして序列を保ち、利己的な争いを避けるためのものであった。

さらには、内部に命令に従わないようなことがおきたり、或いは、運が悪かったり、風向きが、彼らに危険が迫っていることを促すかのようにいつもバイソンの群れのいるほうに吹いていた。りした時には、**wathoni** を保護するという仕組みでもあった。**Wathoni** は、ことがうまく運ばなかったときには、非難の矢面に立つ身代わり（素晴らしいユーモアを持った男であることが不可欠であった）を指名していた。<sup>76</sup>

勿論、狩猟は、バイソンからの偉大なる贈り物を祝い、狩のなかで助けとなる神の力を迎えるために必ず実行されるお祭り抜きに、始まることは決してなかった。**White Buffalo Robe** のオマハ族の印象的な儀式では、バイソンの創造から、狩のすべての段階、夫々の歌は、定められた人間の行動と天与の定めとの間の繋がりを褒め称えるものであるが、19 ほどの歌が順に披露されていた。ポウニー族は、**Great Washing Ceremony** という派手なお祭りで彼らの狩の準備をしていた。このお祭りは、流星の群を占って行うもので、この群れが動物達の来るのを支配していると考えられていた。儀式は、ある指定された小屋から川まで、走り手が神聖な包みの中のもの運ぶという徒競争の形態を取っていた。こうした神聖なものは、インディアン達が近づいたときにバイソンの群れが散り散りばらばらにならないようにするために、川で清めるというものであった。<sup>77</sup> そして、ひとたび、一連の儀式と恒例の会合が終わると、小屋が閉められ、そして、備蓄の洞穴は埋められて、狩が始まった。

夫々のインディアンの集団は、独自の伝統的な狩の領域というものを持っていて、これが、1804 年から 1805 年にかけて、マンダン砦に滞在している間に、ウィリアム・クラークによって詳細に記述されていた。<sup>78</sup> ポンカ族は、大平原の中でも、最もバイソンの生息が豊かな地域の 1 つである、**Niobrara** 川に沿って、**Black Hills** 辺りまでを狩猟の地域としていた。(fig. 2) オマハ族も、**Niobrara** の領域で狩をしていたが、彼らは、ここから南の **Sand Hills** や、**Platte** 川に下がる地域一体で狩をした。オトエーミズーリ族は、南西部にかけてを狩猟地とし、**High Plains** にいたる **Saline** や **Smoky Hill** 川の溪谷を遡って狩をしていた。ポウニー族は、**North Platte** 川とカンザス州の西部の **Solomon** 川との間を狩猟地としていた。**Shiri** 族は、彼ら独自の考えに固辞しながら、自分たちだけで **North Platte** 川あたりでよく狩をしていた；しかし、彼らは、そのほかの時には、南のほうの部族と一緒に狩をしていた。とは言うものの、夜は、いつも彼らは、自分たちが住んでいた村のある最西部のキャンプで過ごしていた。1800 年以後は、ミズーリ川の東側でバイソンの狩猟が実施されることはなかったが、オマハ族や、オトエ族、そして、ミズーリ族などが小さな集団となって、川を渡り、エルクや鹿を求めて、狩に出かけていた。

狩をする地域の地図は、インディアン達の心の中に、“過去にあれこれ起こった事件が、夫々思い出すことができるように生き生きとした絵入りの思い”で、刻み込まれていた。<sup>79</sup> 彼らは、木や水が手に入る、キャンプに都合の良い場所を知っていたし、そうした場所を繋ぐ、乾燥した高原を横切る地下道を覚えていた。その道や渡河する浅瀬、そして、獲物の動物達の群れがいると思われる場所などを、大地に描いた地図の上で杖を使い辿っていた。旅は、村の近くでは見つけることのできないジャガイモの生えている場所、動物達の群れのいるところ、そして、甘いシセリーの在るようなところに向かってコースを選んでいった。

インディアン達は、バイソン狩をする領域で、彼らの敵と出会いそうな場所もよく知っていた。ポウニー族は、Platte 川や Republican 川の上流地域で、コマンチ族、シャイアン族、或いは、アパッチ族と張り合わなければならなかったし、ポンカ族は、Niobrara 川沿いで、Brule Dakota 族にいつも悩まされていた。オトエーミズーリ族は、いつも決まって狩をするときには、カンザ族やオセージ族と衝突していた。そして、ルイスとクラークが発見したように、ネブラスカのインディアン達は、よく、お互いに戦闘を繰り返していた。19世紀の初頭になってさえも、バイソン狩は、その後の数年と比べると、それほど運次第というものではなかった。ダコタ族は、ネブラスカインディアン達が狩をする領域全体を支配していたのではないし、また、適当に大きなバイソンの群れが、夫々のインディアン部族が衝突しない程度の緩衝地帯を作っていた。

バイソン狩の領域にキャンプを張るためのインディアン達の移動は、極めてゆっくりとしていた、且つ又、整然としていた。朝、テントをたたむのに3時間、そして、夕方、テントを張るのに3時間程度要したので、一日に6~10マイルを移動するというのが、程よい移動の距離であった。狩の実際のルートは、おおむねバイソンの動きに依存していたし、そのバイソンの動きは、天候の突然の変化や、あるいは、適当な草があるかどうかによっていた。気温の低い冬の間は、バイソンは Loup のような川沿いのくぼみとなった場所にその寒さを凌ごうと、ずっと東の地域に移動していた。そして、冬が暖かいときには、バッファローの群れは、西部の地域にとどまっていたので、インディアン達は、薪や水が余り手に入らない、そして、沢山のインディアン達が狩をしている地域で、長い旅を続けていた。<sup>80</sup>

狩をする場所に移って行くのは、とりわけ女達にとっては重労働であった。彼らは、まず、朝、一番に起床し、朝食の用意をして、それから、コマツナギに似た草で空になった容器を綺麗にしていた。女達の幾人かが、テントの覆いをはぎ、そして、それを馬の背につけている間に、他の女達は、薪と水が確かにあると思われる次のキャンプ地に向かって歩き出し、そして、そこで、夕飯の支度をしていた。女達がどれほど運ばなければならないかは、その家族が保有している馬の数に反比例していた。たくわえの食料や家財道具に加え、女達は、時に神聖な道具も運んでいた。たとえば、washa'be は、これは、オマハ族の狩をするときの神 watnon 権威を象徴するものであったが、これは、いつも処女の女によって運ばれていた。そして、ポウニー族の神聖なものの入った包みは、女達の背中にくくりつけられて運ばれた。男達はいつも馬ののり、そして、殆ど何も運んではいなかった。というのも、見かけ上、彼らは、敵の襲来に備

えて、武器を持つために手は空いていなければならなかったからだ。<sup>81</sup>

人間関係は、非常にしっかりと確立されていて、移動とか狩の夫々の段階で、神の庇護が恭しく求められた。**Wathoni** は、**non'zhinzhon** と呼ばれた振る舞いのコード、これは、彼を毎日の俗事に紛らわされないようにし、彼を、超自然的なもの、**Wakon'da** の力との間に置くというものであった。そして、彼は、断食し、素足で歩き、家族と隔離して生活し、絶えず祈り続けることにより、この域に到達した。動物の群れのいる場所に到着すると、狩の指揮官は、どのようにして獲物を仕留めるのか、そして、そのルールを誰も破らないように管理するように、指令をするものに指示していた。こうした司令官は、神話的な動物、とりわけ、カラスとか、狼、これらの動物は、獲物の群れを近くに連れてきてくれると頼りにされていたのであるが、こうした動物達の助けに頼った。このことは、相互依存のように思われていて、事実、狩猟が終了すると、狩人たちは、必ず、新鮮な肉を大地に残してきて、それを、狼やカラスたちは、喜んで食べていた。<sup>82</sup>

インディアン達は、バイソンの雌牛か子牛しか殺さなかったが、これは、雄牛の肉が硬くて、かつ、その皮は、なめすのが大変だったからである。時に、**Dunbar** や **Allis** のような観察者達の言からおおよその推定をすると、ポウニー族などは狩がうまく行ったときには、4~5百頭のバイソンを殺していたようだ。<sup>83</sup> 一年に二度ほど、正式な狩を4回行い、そして、その後も、小さな非公式の狩をしていたようであるので、ポウニー族は、毎年、4~5千頭くらいのバイソンを殺していた。インディアン達が、雌牛と子牛を選んで殺していたので、このことが、バイソンの群れの数を保つのに大きな障害を与えていたのではと思われる反面、19世紀の前半にこの地域を訪れた人たちが見たバイソンの膨大な数は、この大量な狩の獲物の割合が、いつも維持されていたということを示している。<sup>84</sup>

インディアン達は、冬の終わりごろの数週間という間は、大きな群れの近くでキャンプをしていた。**Allis** は、1834 — 1835年の冬に、**Skiri** 族とともに、**Platte** 川の合流点の近くの同じ場所で45日間を過ごした。その同じキャンプ地が、毎年毎年繰り返し使われていた。夫々の小屋のある村の光景がいつも代わり映えしないのとは対照的に、狩をしているときのティピーのキャンプの光景は、それはまた壮観そのものであった。数百もの白いティピー、まるで透き通るまでになめされた皮で覆われていたが、これが、大草原に彩りを加えていた。そこには、なにかに夢中にさせるような雰囲気があった。毎日、馬にまたがって狩に出かける男達、女達は、粉を引き、肉を乾燥し、或いは、皮を伸ばして、肉を剥がしていた。あちこちで宴を催し、通常は、バイソンの心臓や、舌を神聖な包みに奉納することを慣例としていた。家を持たない男でも、死んだ動物を解体するのを手伝うことで肉や毛皮を手にすることができたので、食料のない者はいなかった。

村に戻ってくる旅は、沢山の肉と毛皮が一緒だったので、出かけるときよりもゆっくりとしていた。狩の収穫を運搬することは、とりわけ、馬達の消耗がひどい冬の時期には、いろいろ問題があった。馬がないときには、昔からの方法で、肉を運ばせるために犬を使ったが、やっぱり沢山の荷物、女達が運ばなければならなかった。春に、狩を終えて村まで戻るまでに、

彼らは、五ヶ月以上の、そして、五百マイル以上の道のりを旅しなければならなかった。<sup>85</sup> 直ぐに、星と動物達が、彼らに栽培の時期が来たことを教えてくれたのであろう。こうして、また、一連の儀式と、日常生活の活動が、新たに始まったのだ。

### インディアンの世界の周辺

毎年のインディアン達の生活の主たる繰り返しは、彼らの住んでいる村から、狩猟地に行き、そして、戻ってくることであった。過去のある時期に関係したものの達や、或いは、地平線のかなたに何があるのかと言う好奇心に引かれた者達の旅からの情報では、他の部族により領地を主張されている場所など、遠くのことは、交易や襲撃を通しての情報はあっても、ネブラスカのインディアン達にあまりよく知られていなかった。

19世紀のはじめのころのオマハ族の者達に知られていた世界は、東は、ミシシッピー川辺り、そして、西は **Black Hills (fig. 2)** 辺りまでであった。ポンカ族は、オマハ族よりも、もっとあちこち動きまわっていたので、ロッキー山脈のことについても良く知っていたし、また、そこに行く地名もつけていたし、多分、アイダホのネツ・ペレス族や、モンタナのブラックフット族にも会っていただろう。<sup>86</sup> ポウニー族は、**Rio Grande** のスペイン入植地の人たち、そして、南の大平原一帯に良く知られていて、かつ、恐れられていた。また、19世紀のはじめごろまでに、2・3のインディアン達の活動範囲が東のほうに広がっていった。1806年に、探検家 **Zebulon Pike** は、**Washington, DC** への非公式な訪問から戻る途中の二人の若いポウニー族の男に伴われて、ポウニー族の部落を訪れた。<sup>87</sup> 当時、セント・ルイスに行くことは、頻繁に行われていた：オマハ族の酋長である **Big Elk** は、1813年までに数回訪問していた。<sup>88</sup> もっと東の合衆国への旅は、インディアン達に、白人達の急激な増加の威力を印象付けていたのに対し、セント・ルイスという開拓地の町には、それほど違和感はなかったのだ。つまり、1804年の人口が、僅か2,780人というセント・ルイスは、ポウニー族の部落を全部合わせると、間違いなく、それよりも小さかったのだ。

ネブラスカのインディアン達は、アメリカ大陸全体に広がっていた昔からの交易範囲の中の仲間として位置づけられていた。この交易網は、膨大な数の戦略的な交易所を網羅した伝統的な体系からなっていた。大平原では、交易の主となる軸は、ネブラスカ東部の周辺を取り巻いており、西と南のバイソンの狩猟部族(クロー族、ダコタ族、シャイアン族、アラパホ族、そして、カイオア族など)と、ミズーリ川の上流にいたマンダンーヒダツサ族やアリカラ族とを結び付けていた(**fig.2**)。こうした村は、交易の要所であって、カナダからのクリー族やアシニボリなどの狩猟部族たちもここを訪れていた。その伝統的な形—その取引は、前史時代まで遡ることができるのであるが—、のなかで、狩で得られた収穫物(乾燥肉、脂、毛皮、毛皮の衣類、そして、モカシンのような手工芸品など)が、大地からの収穫物、主としてトウモロコシであったが、これと交換された。1700年以降、鉄砲が北のほうの経路を通して持ち込まれ、そして、馬が、南西から北上して入ってきた。こうした二つの経路により膨れ上がった開拓者達が、1750年までに、マンダンーヒダツサ族や、アリカラ族の部落に集まってきた。こ

の取引の中での仲介人として、取引が行われるたびに、100 倍もの値段を吊り上げて、こうして、ミズーリ川の上流に居住していたインディアン達は、大平原に住んでいたインディアン達が気付かないうちに大変な富を蓄積していた。<sup>89</sup>

では、ネブラスカの定住インディアン達はこの有利な交易で、かなりの儲けを得ることができたのであろうか？ まず、彼らは、農業で成功を収めていたにもかかわらず、彼らは、マンドンーヒダツサ族やア리카ラの部落に必要なだけの十分な食料を定期的に収穫することが出来なかった。そして、二番目に、彼らは殆ど鉄砲を所持しておらず、トウモロコシとともに、遊牧の民族が求めていたものが鉄砲なのであった。よく武装化されているといわれていたポウニー族でさえも、1806 年には、二人の戦士に鉄砲は一丁というものであった。<sup>90</sup> 第三番目には、とりわけ、ポウニー族は、絶えず、西部地域のインディアン達と戦闘状態にあり、苦心して確立された交易のしきたりでさえも抑えることができないほどの敵愾心を、何時も心に抱いていた。さらに、最後に、ネブラスカの東部のインディアン達は、彼ら自身がイギリスやセント・ルイスの商人たちを通じて、ヨーロッパやアメリカの商業生産物を手に入れることが出来たばかりでなく、彼ら自身もポウニー族と馬の取引の取り扱いをしていたので、自分たちに必要なものは十分に手にすることができた。

**Table 3 Estimated Dollar Value of Furs and Consumption of Goods, 1804**

<i>Indian Group</i>	<i>Goods Consumption</i>	<i>Fur Production</i>
Otoe-Missouria	\$4,000	\$6,000
Omaha	\$3,000	\$5,000
Ponca	\$1,000	\$2,000
Pawnee Total	\$8,800	\$13,500
Skiri	\$2,400	\$3,500
Chaui	\$3,200	\$5,000
Kitkahahki	\$3,200	\$5,000

Source: Moulton, *The Journals of the Lewis and Clark Expedition*, vol. 3, 388-400. See pages 398-99 for discrepancy in the Ponca estimates. Note: The value of the merchandise consumed includes transportation costs, which averaged about one-third of the whole amount. The value of furs produced was estimated by the "peltry standard" in St. Louis, which was forty cents a pound for deer skins, with all other furs being valued against this standard (389-90)

ネブラスカ東部のインディアン達の取引の殆どは、局地的な出来事であった。<sup>91</sup> オマハ族は、定期的に、ポンカ族のバイソンからの製品とトウモロコシを交換取引していた。勿論、ポンカ族は、彼ら自身もトウモロコシを育てていたが、しかし、彼らは、狩のほうに主眼を置いており、交換取引により穀物を手にするという選択をしていた。これは、二つの部族は、彼

らがもともと手に入るものでも、必要なものを交換するという“余剰物の取引”の例であった。このやり方は、もし、1つの部落で収穫が十分でなく、トウモロコシが不足したようなときに、彼らの間にしっかりとした取引網を保つということに役立っていた。同様な安全のために、ポウニー族は、アリカラ族や、マンダン—ヒダツサ族とトウモロコシの取引をしていた。トウモロコシやそのほかの食糧は、ネブラスカの東部地域を通じて、旅行者達とも交換取引されていた。1811年の夏には、たとえば、Bradbury は、“膨大な数の”オマハ族の者達が、彼らの村で、交換用のトウモロコシ、バイソンの肉、そして、タバコや、バーミリオン、或いは、青いビーズ玉と交換するための油などを用意して、待機しているのを見ていた。<sup>92</sup>

ポウニー部族は、この領域ではかなり遠方に位置する主要な取引相手であった。彼らの近隣の部族—北のほうでは、アリカラ族、そして、南の地域ではウィチタ族など—との取引に加え、彼らは、3年に一度くらいの割合で、サンタ・フェにも大きな隊商を送っていた。<sup>93</sup> ここで、彼らはスペイン人から、馬や毛布などを手に入れていた。ポウニー族もまた、ウテ族から、多分、ショショネ族と出会う辺りで、馬を手に入れていた。こうした交易は、南西部のワイオミングの様々な場所で毎年春に行われた大集結のときに実施されていた。(fig.2) ユテ族は、その見返りとして鉄砲を手に入れていた。ポウニー族は、オマハ族に対し、彼らの優れた工芸品である弓矢と交換するために沢山の馬を提供していた。<sup>94</sup> また、馬は、ポウニー族の部落を通過する旅行者達にも売られていた：たとえば、1806年の10月6日に、Pike は、自分が西部を探検するのに必要となる、僅かの“貧弱な馬”のために、“法外な額”と思いながらも、高額な支払いをしていた。<sup>95</sup>

ネブラスカの東部のインディアン達は、19世紀の初頭の2・3年の頃までは、ことごとく、取引のためにセント・ルイスに行きたがっていた。Pike は、この取引の量は、それほど大きなものとは思っていなかったが、しかし、ルイスとクラークが明らかにしたもので、かなりの交換取引が行われていた(Table-3)。

ここで、インディアンたちはおもにバッファローの毛皮を提供していたが、それだけでなく、鹿、カワウソ、アライグマ、そして、ビーバーの毛皮なども取引されていた；これに対して商人たちは、通常、すでに商業生産されていた品物を提供した：ブルービーズ、バーミリオン、ナイフ、斧、鉄砲、弾薬、そして、酒などであった。インディアン達は、こうした取引の品物のうち、おそらく、戦争で有利に闘うための鉄砲と弾薬以外のものは、直ぐに、それらがなくても生活できるようになった。しかし、商人たちは仕切りにかれらにその必要性を説いていた。とりわけ、酒の需要を、Pierre Tabeau が、1803年に、洞察力鋭く、ひとたびそれが必要ということになると、それは、どうしても必要なものになっていくと述べていた。ルイスとクラークも、このことをよく認識していて、将来、インディアン達は、“自分たちの支払いが出来るだけの商品を、必ず消費する”ようになるだろうと考え、毛皮の取引を拡大するための重要な拠点として、Platte川の河口近くに交易所を設立するよう主張していた。<sup>96</sup>

アメリカ人の商人たちは、自分たちは、インディアン達の取引の基本的なやり方と、その儀式に適合していかなければならないと次第に理解していった。もともと、取引は、必要性和

その時の状況に応じて一年中行われていたのであろう。しかしながら、中でも、最も重要な取引のシーズンは、分厚いバイソンの毛皮が豊富な春先と、食糧となる穀物が収穫され、そして、夏の狩の後で沢山の肉があった秋だった。インディアン達の取引のグループの大きさはまちまちであったが、時には、村全体というような大きなものもあった。男も女も取引に加わっていたが、一般的には、男は男同士、女は女同士で、自分たちがつくったものを交換していた：たとえば、女達は、トウモロコシの殆どを取引していた、一方、男達は、馬や鉄砲の交換取引をしていた。利益というのが、主たる動機であったが、しかし、アメリカの商人たちが学んだように、インディアン達は品物の価値を差別し、自分たちに有利なようにことを運んでいた。

こうした取引のほとんどは、実際には、平和のパイプの儀式と関連したお互いの贈り物の贈呈がなされた。この儀式 — ポウニー族には、Hako が、そして、オマハ族には、Wa'wan が、というように — 中央の大草原や、そのほかの地域でも広く普及していたものであった。それは、普段は敵対関係にある部族同士でも、この取引をする間は友好的な関係を維持するという意味を持っていた。平和のパイプは、カテリナイトで出来た火皿のついた木製（オマハ族のものは粘土製）の軸がついたもので、通常は、交易をしている集団同士の架空の相互関係を作り出すために使われていた。パイプを贈るほうの人、あるいは、集団が、“父”となり、そして、それを受ける側が、“息子”となった。ルイスとクラークが説明していたように、“与える側のグループが、普通、自分たちの誤りを告白し、そして、平和を請う。一方、受ける側は、彼らの首尾がうまくいったと大喜びをし、その神聖なパイプの柄を手にするのだ。”<sup>97</sup> 大量の贈り物 — わしのはねの帽子飾、弓と矢、織物、毛皮、食料、そして、鉄砲など — が、パイプの儀式に伴って、お互いの礼儀を尽くすものとして、そして、現実の取得の意味で、行ったり来たりしていた。この平和のパイプの儀式は、特殊な社会でも、その絆を強くするために使われていた：たとえば、ポウニー族のなかのある集団の場合には、それを彼ら全体の意識を固めるために使っていたし、オマハ族の場合には、これまでずっと以前から、お互いの絆が崩れていくような心配のあるときに、それを儀式の中に取り入れていた。<sup>98</sup>

襲撃は男たちの副業であり、そして、成功への近道であり、彼らの希望の対象であった。<sup>99</sup> それは、基本的には、それにより一般のものが富と社会的な地位を得、その結果として、要人になっていくことを意味していた。襲撃の多くは復讐、つまり、それ以前の敵の攻撃に対する仕返しのようなものであったが、1800年までの、もともとの動機というのは、戦利品、とりわけ、馬がその対象であったが、これを獲るためのものであった。先頭集団が村に戻ってきたときには、戦利品が村の酋長に、あるいは、戦争集団の首長で、その襲撃を認可した僧侶に対して、贈り物が贈られたものと思われる。そうした、勇気と度量の大きさの誇示により、世襲のリーダーの次の地位に到達するために、戦士たちの序列を上って行ったのであろう。1860年代でさえも、ポウニー族の若者たちの間では、成功するためのこの手立てが彼らの気持ちを支配していた：その時代に、Lone Chief、彼は、Kitkahahki 酋長の末裔の息子であるが、母親から、“いつも小屋のなかに居るようなことは、偉大な人物なる男のすることではない；一所懸命働き、汗を流し、いつも、出陣をして疲れているのが、男のすることだ”と忠告されていた。<sup>100</sup>

1800年のネブラスカ東部のインディアンたちにとっては、戦闘は、あちこちでおきていた。ルイスとクラークは、毛皮の取引がもつとうまく運ぶようにと、インディアンたちの間に平和が確立されるのを望んで、彼らの敵対する気持ちのなかに特別な感覚を作った。<sup>101</sup> オトエーミズーリ族は、ポウニー族やカンザ族とは、“部分的に友好関係”を持ってはいたが、“それ以外はことごとくの部族”と、敵対関係にあった。唯一、ポウニー族だけが、アリカラ族とオマハ族と定常的な敵対関係を持たない部族であった。オマハ族とポンカ族は、オトエーミズーリ族と、そして、ヤンクトン族以外のダコタ族の各集団すべてとの間で諍いをしていた。たとえば、1804年の夏に60人のオマハ族が Brule Dakota 族の襲撃で、殺されたり、拿捕されたりしていた。協定でさえも不安定であり：ポウニー族は、交易をするのと同じように、ウィチタ族の襲撃もしていた。そして、1802年の大飢饉のときには、オマハ族は彼らと友好関係にあるポンカ族を、食料目当てに襲撃していた。

襲撃は、何時であろうと年がら年中行われていた。襲撃が非常に広範にわたり行われていたということが、1825年のアーカンソー川の上流のアラパホ族のキャンプを襲っていた、オトエ族の小さな集団によっても認められる。(fig. 4) よく、戦闘集団が食糧の確保を目的としたバイソン狩の帰りに、川と川の間に分水線を旅しながら、盗まれた馬を取り戻せることを願って出かけて行った。一般的には、僅かに8人から10人位の集団であった：猟師達とか、モカシンの運び手、ヤカンの運び手、そして、キャンプの設営をする人たちの小さな気まぐれの的な集団であった。戦士達は、丁度、亡くなったばかりの身内、特に子供の場合に、“死人と一緒に連れそう人”として、よそ者を殺そうというとき以外は、1人で襲撃に出かけていくことがよくあった。<sup>102</sup> 時に、大きな集団となって襲撃の探検に出かけていくことがあった。Pike は、たとえば、ポウニー族は、よく、200から300人位の男達を南の大平原に送り込んでいたといっていた。<sup>103</sup> こうした大規模に遠征は、モカシンの面倒を見、料理をする、そして、獲物も平等に分配されていたのであるが、そうした女達も含めていた。

どんな戦闘集団も、酋長や僧侶により認められたものでなければならなかった。こうした、正式に認められたものでない襲撃から戻ってきた戦士は、厳しい咎めが待っていた。認定と言うことは、襲撃の成功についての責任を天の力に受け渡すという意味を含んでいた。たとえば、オマハ族の社会では、軍事行動は、戦争にかかわる四つの神聖な包み ( wai<sup>ni</sup>waxube ) の関連した儀式により制約されていた。こうした包みの中には、雷の特別な伝達者、戦争の神として認められた鳥の残骸を包んであった。ひとたび、正式に認められると、襲撃の結果は、天の力の手の中にあり、そして、リーダーは、たとえそれが失敗しても恥じることはなかった。



Fig. 4 アラパホ族を襲撃したときのオトエ族の襲撃部隊の経路  
出典 Central Map Files, National Archives, RG 75, No. 931

野戦は一般的にはおこなわれていなかった。そして、1800年には、それぞれの領域では戦いがなかったし、また、パトロールされることもなかった。大事だと思われていたことは、勇気を示すことであり、馬やその他の品物を手に入れることであり、敵の穀物や食料を保管している場所を荒らして敵の経済的基盤に打撃を与えることであった。大成功を収めた襲撃部隊は、壮大な祝賀の儀式を行うために村に戻ってきた。戦争のための神聖なる包みの前に立って、オマハ族の戦士たちは、彼らの手柄を列挙した：手とか弓で無傷の敵を鞭打ったことは、最大の栄誉であ

った；敵の一人を殺すということは、名誉の序列から言うと四番目のものであった；そして、死んだ敵の首を切り落とすというのは、六番目のもので、名誉としては一番レベルの低いものであった。こうして、戦士たちは名誉を積み重ねてゆくことにより、彼は勇気があり、目的をかなえた男であることを誇示するような象徴的な戦士の飾りを身につける資格を得ていた。こうして大成功をした戦士は、酋長や僧侶、そして、儀式などで贈呈するための沢山の馬や品物を保有する裕福な男であった。だから、襲撃を抑制するということは、富とか、社会的な地位、そして、自尊心を手に入れようとするのを妨ぐことにより、社会組織の中での男の役割の中心的なものへの権利を断ち切るものであった。

### 安定と不安定さ

ネブラスカ東部のインディアンたちの世界は決して安定したものではなかったが、しかし、1800年以前は、その変化というものは、大きな破壊などというものはなく、十分に順応できるような速度のゆったりとしたものであった。ところが、19世紀のはじめころになると、その変化は、実質的には、一夜にして起こるようになり、その衝撃は、とても吸収できないほどの困難さを増していった。

こうした変化のすべてが、北アメリカにヨーロッパ人やアメリカ人たちが入ってきたときまで遡ることができる：馬が南西でのスペイン人たちから広まっていき、ありとあらゆる商品がセント・ルイスから流れてきて、病気は、あらゆる方向に蔓延していった。移住者が、シャイアン族とかダコタ族といったような強力な放浪狩猟部族の住んでいるミズーリの地を横断し、ヨーロッパ人やアメリカ人から東の地域に至る圧力の下で、馬や取引商品の競合に加わり、このバイソンの狩猟地域で沢山の敵と遭遇する危険性をどんどん増やしていった。このため、自分たちの酋長の生命を危険にさらしながら、そして、村人たちは、自分たちの住んでいるまわりに砦を築くという形で、自分たちを守るための戦闘というものが当たり前のものとなった。村の襲撃は、必ず報復されることになり、この防護と襲撃の果てしない繰り返し、心のなかに焼きついていった。ルイスとクラークがこの地を通り過ぎるときにオトエーミズーリ族とオマハ族との間には、こうした緊張した関係があり、びりびりとしていた。

ますます強まるこうした戦闘が、病気とともに、それまでの伝統的な村での暮らしに大きな抑圧感を与えていた。人口の減少と防護の必要性が、18世紀の間のポウニー族の、村の結合という結果につながっていった。Holderが、“自分の集団に属する生き残った者と一緒に、ほかの部族の村に結合して行くその酋長のやるせない立場”を“考えてみてください”と書いている。<sup>104</sup> どうやって、彼は自分の地位を保持することが出来たのだろうか？ 新しい村の酋長が彼の責務を求めたときに彼は自分の所有物をどのように保持することが出来たのだろうか？ それぞれが違った血族の者たちは、村のなかでどのようにして、仕事を分担する組織の中に解けこんでいったのだろうか？

酋長たちの間での、そして、それに従う一団同士の間での敵対意識が。毛皮の取引を通しての新しい富への思惑のなかで、次第に悪化していった。たとえば、1800年当時のオマハ族の専

制的酋長であった、**Blackbird** は、毛皮の取引を、権力の看板として利用していた。彼は、商品の見返りに毛皮を与えるなどして、取引商人達を威圧していた。そして、噂によれば、彼は、自分の敵を排除するために使う、毒薬なども手に入れていたとのことである。スペイン人の取引商人の **Jean Baptiste Truteau** は、**Blackbird** が少なくとも、村に入ってくる商品のうちの 1/3 を手に入れ、そして、その残りの分配を支配していたと推定していた。**Blackbird** は、かれは、もともとも戦士から出発した人間であるが、彼自身、オマハ族の“最高の権威者”にまで、のし上がる事ができた。<sup>105</sup>

**Blackbird** の権力者への出世物語は、インディアンたちの社会の中で行われていた、ますます深くなる階級闘争の例である。確立されたリーダーシップは、戦闘や取引で勢力拡大の機会を増やしていった若者たちにいつも挑戦されていた。派閥—リーダーとか彼の一族—が、村の生活の上部構造の亀裂として現れ、そして、この意味において、村は”家族の自然発生的な集まり”に過ぎないということを思い出すことに意味があった。<sup>106</sup> ポンカ族やオマハ族が 1800 年以前に同時にそれをしていたように、彼らの社会は簡単に結合していったのと同じように、簡単に、また分離していったのかも知れない。

内外的なこうしたさまざまな圧力の下で、ネブラスカの東部のインディアンたちの社会が、19 世紀にも及ぶほど長い間、相互に維持されていたということは注目に値する。この立ち直りの力については沢山の理由がある。その中でももっとも現実的なものは、彼らの生活の手段というものが働いており、何百年もの間耐えてきたというものである。狩猟と、栽培と、そして、野生の植物の収集というものが結合されたサイクルが、広い平原のなかでの彼らの生活の場所を広げて行き、そして、大平原の中での伝統的背丈の高い草の環境と、背丈のまあまあの草の環境とに、うまく適合していったのだ。日々の生活は決して楽ではなかったし、危険をはらんだものであったが、しかし、生産のサイクルというものは維持できる程度のものであったし、天然の災害とか、戦争、そして、病気などで破壊されることが無ければ、十分な食料を確保することが出来た。1800 年までに、沢山の馬が手に入るようになり、経済的な特化が非常に長距離同士の取引を可能にすると、栽培をやめて、バイソンの群れに依存しようという意識が強くなってきた。少なくとも、ポンカ族は、定期的にこのようなことをしていたし、シャイアン族やアラパホ族も、その後の一世代の間に、定住的な生活から、放浪し狩りをするという生活に移っていった。しかし、彼らの食料の問題と、そして、宇宙感のなかでのとうもろこしの現実的な重要性というものが、ネブラスカのインディアンたち、とりわけ、ポウニー族にとっては、変革を困難なものにしていた。さらに、村というものが彼らの生活の場であり、彼らの先祖たちが埋葬されている場所であったのだ。そして、もっとも悲惨な環境にあるものだけが、（オマハ族が、1801 年に天然痘に苦しめられた村を逃れたときのように）彼らが見捨てた村なのであった。

村的な生活の復元力は、いさかいを最小限にし、そして、安定というものを推進するために数世紀にわたり工夫してきた、多くの社会的なきざらと手段に負うところが大きかった。たとえば、オマハ族の七人の酋長からなる最高会議は、早い時期に、社会の秩序を保持し、さまざまな血縁関係社会を結びつけるために実行された政治的な大きな進歩であった。平和のパイプは、

平和と、そして、部族を統合するための特殊な道具であった。バイソンの狩りの指揮官や、彼の不幸な見せしめの身代わりとなる人々のような、巧妙に考え出されたものたちは、いさかいを収めるための機能を持っていた。1800年には、そして、19世紀に入り、二・三代目くらいまでの間は、こうした、揺るぎの無い世襲的なリーダーの存在する血縁関係社会体系というものが、村的な生活の短い期間で見た安定性というものに貢献していた。

村的な生活のもっとも本質的な強さというのは、伝統的な信仰と儀式のなかにしっかりと根を張っているということであった。宗教的な儀式は、社会の組織人、とりわけ、活動的な若い男たちの行動を制御するという働きをしていた。儀式は、Fletcher や La Flesche の言葉を借りれば、“自己管理、平静さ、そして、権威に対する服従といったものの重要性を、一般大衆の感覚の中で議論する手段”であった。<sup>107</sup> たとえば、バイソン狩りでの振舞いの中に、厳格に、そして、宗教的に定められた項目、そして、神聖な包み、あるいは、戦争の束などにより襲撃部隊の拘束というものが、こうした活力を天の力に結びつけ、そして、規則のいかなる違反をも、神そのものに対する罪であると考えていた。

宗教というものは、みんなが抱いている信仰の庇護のもとで、すべてのものをともにまとめる同族意識というものを人々に与えていた。この同族意識というものは、神によりその人達に与えられた基本的な特別なものである存在の神聖なる柱とか、村の包みと言ったような象徴されるものの中に大事にされていた。最も寛大に感覚で見るとすれば、宗教というものは、インディアンたちの伝統的生活の手段の裏にある目的というものを提示していたのである。あらゆる世界というものが、神秘的な生命の力を示していたし、また、実直な儀式の実行と、適切な遂行を通して、インディアンたちは、この力との関係の中に入り込むことが出来たし、彼らの努力を实らせることができた。

こうした生命の基礎のあらゆるものが、ルイジアナ領域の買収と、ネブラスカの地域をアメリカ人入植者たちへの開放の間の半世紀の間に次第にその土台を崩されていった。毛皮商人たちは、インディアンの労働と、虐げを求めてやってきた。そして、宣教師たちは、インディアンの魂を救うために急いでやってきた。政府の役人は、インディアンたちを農業に従事するように試みて、彼らの土地を買収する手立てを開始した。インディアンが、合衆国の東部から立ち退きを強要され、そして、大平原の縁の地域に再入植をし、オレゴンやカリフォルニア、そしてユタへ向かう数十万人の移住者たちがネブラスカを荒らしまわっていくようになると、外の世界が、にわかインディアンたちの世界に入りこんできたのであった。ダコタもまた、意図的な皆殺しの戦争に村が巻き込まれ、切迫していった。